

---

# きーどあいらっく！

倉石さん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

セーデあいりっく！

### 【Zコード】

N1173Y

### 【作者名】

倉石さん

### 【あらすじ】

夜永 契は平凡な日常の最中、何の前触れもなく両親を殺される。狂おしい程の感情の奔流に苛まれる中、目の前に現れたのは淫魔（本人談）だった。

淫魔は契に取引を持ちかける。

淫魔との契約の代償に契は少女、リンを護る事になる。

そしてそれは契約の代償で有り報酬でもあった。

リンが貴方の望みへと導いてくれる。

それが淫魔の残していった言葉だった。

彼が契約と同時に失つてしまつた鍵とは一体何なのか。  
そして彼以外に現れる4人の契約者の少女達。  
リンを追う謎の組織。

全ては彼の知らない所で起こつた、とある出来事に帰結する。

これは自称ロリコンの高校生、契が契約と共に力を駆使して一人の少女を護る、愛と復讐のお話。

このお話には多少主人公無双成分が含まれています。

また現実での兵器等多少血なまぐさい表現もございますので  
免疫耐性等お持ちで無い方はブラウザの戻るを推奨いたします。

11月4日を持ちまして、第一幕がほぼ完結致しました。  
貯蔵分が尽きたのでこれからのお更新は多分最大最速で2日に1回つて所に成ると思いますが今後ともお付き合い頂けると幸いです。

## 第一幕『ふるわーぐ』（前書き）

このお話はフィクションです。

現実に存在する人物、国家、組織、団体等とは一切関係ありません  
のでご了承ください。

第一幕までは書きためた物があるのでさくさく更新して行きます。

その先は……わかりません。

尚、誤字脱字当有りましたら感想等で報告して頂けると大変ありが  
たいです！

## 第一幕　『ふるるーぐ』

空を見上げる。

いや、見上げる必要性など本来は存在しない。  
校舎の屋上に立つ自らの瞳と、空とを隔てる様な建築物などこの  
街には存在しないのだから。

しかし、この時の空を見上げるという行為は、その行動を起因し  
た自己の感情と相対するために無意識下で行われる動作であり、別  
段、蒼白く光を纏う満月や、申し訳程度に散然と輝く星達に対して  
美辞麗句を並べる為に行われた物ではない。

だが、自己の感情と相対する、という観点からもこの行動は矛盾  
を孕む事になるだろう。

それを示唆するかの如く、屋上の鉄柵に手を掛け立ちつくす俺の  
横でぺつたりと冷えたコンクリートに座り込んだ少女がこちらを不  
思議そうに見つめている。

幼さの残る上目遣いの瞳は純粋で、一切の穢れを含まない。  
月の光を受けた真つ直ぐな銀糸の頭髪は夜風に揺れる度に光の粒  
子を振りまくような錯覚さえ抱かせる。

だがそんな彼女の瞳を見ると、やはり想像してしまうのだ。  
まるでそう

一致するはずの鍵穴に、差し込んだ鍵がつっかえた時のような違  
和感。

単純に言えば、期待を裏切られた際に人間が見せる瞳。

人の視線から読み取れる感情なんて、ほとんどが被害妄想だ。

自分がそう思っているから、そう感じてしまう程度の物。

本人の考えつく事が出来た可能性の中から選びとった一つの答え  
に過ぎない。

首をかしげた少女が問う。

「うれしいの？」

「いや、俺は喜んだりしない。」

「じゃあ怒ってるの？」

「いや、俺は怒ったりしない。」

「泣いてるの？」

「いや、俺は悲しんだりしない。」

「楽しいの？」

「いや、俺には楽しむ事なんて出来ない。」

「じゃあ……なんでお空を見るの？」

一瞬の沈黙の後に答えを返す。

「リンにはまだ理解できないわ。」

形だけ繕つた笑顔を少女へと向ける。

「むう、パパのイジワル……。」

理解できるはずもない、自分でだつて理解できていないのだ。

ほんのりと朱に染まつた頬を膨らませて夜の街並みへと視線を移すリン。

そんな表情さえ何となく絵になるのだから末恐ろしい。

先に言つておこう。

俺はロリコンだ。

ただし、それが一般的に言われる【ロリータコンプレックス】という枠に当てはまるかと言われば、それはわからない。言葉にはたくさんの意味があるのでから。

閑話休題。

「とこりでリン、相談なんだが。」

「なーに？」

機嫌を損ねたのか、そっぽを向いたままそっけなく答える。

「いまさらだが、パパはやめないか？」

ちなみに俺はまだ一五歳、世間的に言つ高校一年生だ。

時代が時代なら元服という形でパパになる事も不可能ではないだろうが、残念ながら今の時代はタバコもお酒も二十歳からだ。

「じゃあお兄ちゃん？」

「パパ以外なら好きに呼んでいい。」

投げやりに答えを返す。

そんなどうでもいい事に頭を抱えてうんうんと悩むリンを傍目に俺は再び空を見上げた。

そして静寂の中に佇む、つい最近まで通っていた中学校舎に、大の大人の情けない悲鳴があがるのを耳にし、無感情に思う。本から得られる知識はやはり馬鹿に出来るものではないな、と。

## 第一幕 第一章 『事起』（前書き）

このお話をフイクションです。

以下略

## 第一幕 第一章 『事起』

一ヶ月前、高校入学を目前に控えた俺は、残った春休みを特に何をするでもなく、ただいつもどおりに過ごしていた。

だがその日はいつもと違い、日覚めた時には早朝にランニングを行ついつもの時間を3時間も過ぎていた。

いつもならランニング後に食べる朝食を起きたばかりで余り食欲のわかないままに胃に詰め込む。

だがランニングは毎日行つから意味がある、といつ持論を持つ俺は、既に朝食を食べ終えてテレビを見ていた両親に軽く声を掛け、ランニングに出かけた。

「車に気を付けるよ。」

「水分補給は忘れちゃダメよ?」

そんな声を掛けられ家を出た覚えがある。  
ほんの三十分程度だっただろうか。

いつものランニングコースを回り家に戻った俺は遠目に、家の前に停まる一代の黒い年代物の高級車を見かける。

それに乗り込み走り去る一人の神父。

一抹の不安を感じ、自宅玄関の扉前に立つ。

普段よりも重く感じるそれを聞くと、家を出た時と変わらずに流れれるテレビの音に杞憂を感じた。

ただいまの声と共にリビングの扉を開いた。

そこは俺の知るリビングではなかつた。

まるで演劇の舞台の様な、浮世離れした光景。

# 一面を染める真紅のカーペット。

ドクソツ

# 乱雑に配置された家具

ドクシ

漆黒の闇を抱く、光の無い双眼。

ドクンツ

# 糸の切れた人形

俺の意識は、一度そこで途切れた。

気付いた時には病院のベッドの上。

目を覚ましてまず視界に入ったのは沈鬱な面持ちを浮かべる母方の祖父母だった。

両親の死体と共に倒れていた所を発見された事、これからは祖父母の元で暮らすことになるであろう事を嗚咽混じりに告げられ、現実感を得られないままに他人事の様に聞き流した。

一通り話が済んだ所で、控え目なノックの音と共にスースを着込んだ中年の男が一人、病室に入つて来る。

怪訝な顔をする祖父母の事など意に介さない様子で俺に事情の説明を求める警官に、ただ早く静かな空間を求める一心で、自らの見た物を淡々と説明する。

職業柄なのか俺の態度が気に入らなかつたのかは知らないが、終始胡散臭そうな目でこちらを見つめていた警官は、一応は納得といった様子で病室を出て行つた。

祖父母に対しても、少し一人にして欲しいと病室から追い出し、ようやく静寂が訪れる。

そこでやつと、両親の死という非現実的な、だがまごう事無き現実を実感し、胃がねじ切れるかのような痛みに襲われた。

ノドまで込み上げる不快な酸味にさらに気分が悪くなる。

起こしていた体を横たえると不快感から体が逃れたがるかのように、急激な睡魔に襲われ、それに抗う気も起らず汚泥の様な眠りに落ちた。

不意に目が覚める。

瞳にはただ真っ白の天井が映り、カーテンの隙間から忍び込む月明かりと街灯に反射して青白く光るそれは、病室の静寂を際立させていた。

病室で目が覚めてから初めて、落着いて周りを見渡す。

どうやら俺は怪我も負つていらない身分で個室に寝かされているようだ。

何か他の病人に申し訳ない気もするが、それ以上にこれから先の事に対する不安や、両親を同時に失つた悲しみ、そして自分だけが助かってしまったという事に対する罪悪感。

微かに存在する、自分だけは助かった、という安心感。

そんな腐った物が自分の中に確かに芽生えていた事を、否定する事が出来ない自己嫌悪感。

そして恐らく両親を殺したであつたあの神父へのただただ純粋な怒り、いや殺意と言つても差支えはないだろう。

それらの感情が同時に頭をめぐり、心を引き裂く。

胃の腑が抉られる様な痛みを伴う感情の昂りに、治まっていた嘔吐感がぶり返してくる。

殺してやる。

生半可な殺し方じゃない、考え得る限りの苦しみ、痛みをもつて。だがわかつている。

俺にそんな力は無い。

心が黒い何かに押し潰されそうに、飲み込まれそうになる。

そんな時だった。

……げようか。

それは耳穴を通り、鼓膜を振るわせる様な音ではない。

叶えてあげようか。

響いてくる。

頭の中から直接、声が。

「……誰だ。」

ふふつ、どうだつていいじゃない、そんな些末な事。

ハープの音に意味を持たせたような美しい声。

私には貴方の願いを叶える力がある。

人を見下した、嘲笑まじりの口調。

そして貴方は願つてゐるし、願いの代償だつて持つてゐる。

「代償……？」

それは、前触れなく現れた。

「 そう、代償よ。」

脳に響いていた声が、氣づけば耳朵を振るわせる波をもつた音となる。

氣のせいだと思いたいが、残念な事に耳元に感じる吐息を氣のせいだと言い切れる程おれは鈍感には出来てしない。

意を決して、突如現れた存在に目を向ける。

「 なつ……。」

そう無意識に咳いてしまう程、それは人間離れした美しさを持つていた。

肩にかかる銀の髪は暗い病室の中で夜の光を浴びて光の粒子を放ち、釣り目がちの瞳は不敵な笑みを浮かべる。色素の薄い朱色の唇は両端が吊りあがり、それは今にも唇と唇が触れてしまいそうな距離にある。

熱い吐息が肌に触れ、完全に身動きが取れなくなる。

そこで視線はようやく彼女の背中を捉える。

一瞬自分の目を疑つたが、そこには確かに翼がある。

三対、六枚からなる大鷲のよつた翼。

しかしその色彩は大鷲のそれとは異なつていた。

一方は暗闇の中で逆に際立つ程の、漆黒。

そしてもう一方はその物が光を放つてゐるかのよつて白く輝く、純

白。

頭に浮かぶのは、天使と悪魔の一語。

視線を下げれば前かがみにしなだれかかるような体勢からの必然といふべきか、彼女の大振りな双丘が露出の多い薄灰のフリルドレスの胸元から溢れんばかりにその存在を主張している。  
もし今も眼前でフワフワと動いている六枚の翼がなければ、どこのコスプレ会場から紛れ込んできたかと思う様な、頭の先から爪先までがゴシックファッション。

おまけに、熱くもない病室で紅潮し、若干熱を帯びた様子を窺わせる大粒の雫をその胸元に湛えている。

「あらーー？ お姉さんのこれに興味でもあるのかしら？」

視線に気付かれ、俺は大きく揺れた二つの果実から慌てて目をそらす。

一度目を閉じ、まずは冷静さを手繕り寄せる。

「はあ……ちょっと待て、まずは少し離れる。」

先程から危うい距離と体勢を保つたまま動こうとしない彼女の肩を、半ば無理矢理に押してどかせる。

肩に触れると、シルクの様な肌触りの薄い布越しでも、彼女の体が熱を持っているのがわかつてしまう。

そのうえ肩に触れた瞬間、ビクリと体を震わせ、切なくも短い嬌声を零すときた。

悪魔や天使というより、淫魔というイメージがシックリとくる。

「んもう……強引な子ね……。」

などと口にしながら、されるがままに体をどけるが、その瞳は明らかに此方の反応を見て楽しんでいる節があった。

そうはさせるものかと、意地になり無表情と無反応を誇示する。

「せっかくのサービスだったのに、勿体ない事したわね少年。」

そんな事をのたまないながらしぶしぶ二本の足で立つ彼女を見て、少なくとも幽霊ではない様だと安心する。

もしかしたら幽霊であつたほうが幾分かましだつたかもしれないが。

「さて、単刀直入に聞こう、お前は一体何だ？」

彼女の瞳を真っ直ぐに見詰めながらそう問う。

だが彼女は含み笑いを湛えるだけだ。

なので続ける。

「俺の脳内妄想だとするなら、俺は随分欲求不満らしい。」

ため息混じりの俺の言葉に、

「妄想ねえ……？試してあげよっか？」

そう言いつつ妙に色っぽく体をくねらせると、割とぴたりとしたドレスなのか、やたら二つの果実が強調されるので取り合えず、呆れたように目を伏せる。

「妄想かどうかなんて、触れてみないと分からんじゃない？」

「つるさい淫魔、妄想でないなら夢だ。そうでなければただの変態だ。」

「あらあら……随分失礼なボーヤね、妄想と夢に大差なんてないでしょ。だいたいこんな絶世の美人の変態なんているかしら翼もあるし。」

さて、頭がおかしいのは俺か、この女か、どちらの方だろうか。諦め悪く、【夢から覚める】だとか【誘惑に乗る】だとか、ノベルゲーム的選択肢が眼前に現れる事を願つ。

もちろん選ぶのは前者だ。

だが待つても一向に現れないであろう物に期待を抱くのはとても生産的とは言い難い。

頭を切り替えて女に向き直る。

「それで、俺に一体何の用だ、変態オブ夢の住人（願望）よ。」

ちなみに（願望）まで口に出している。

人と人との「ミコニケーションに限らず、人と人ならざる者（変態）のそれにおいても、相対する対象には自分の感情意思を分かりやすく伝える必要があると俺は常々考えている。

それが100%悪意だとしてもだ。

「人間不信な子ね、あなた友達いないでしょ。」

「その言葉が使えるのは恐らく相手が人間である場合のみだ。友人については余計なお世話だと言わせてもりおつ。」

俺の名前は夜永<sup>よなが</sup> 契<sup>ちぎり</sup>、孤独を愛する一匹狼だ。

英語でいうならロンリー・ウルフだ。

涙？これは心の汁だ。いや汗だ。危ない、棒が一本足りないだけで大変な事故を起こすところだつた。

「いまの構想事体が大事故だと思うわ。」

「何を言つ、この程度の事象を事故扱いしようものなら年間事故発生件数において某神<sup>みこと</sup> 県を追い抜いてこの県が常に不名誉の一位を取り続ける事に……ん……？」

警察の憂い顔を想像する前に何かがひつかかつた。

「おいお前、俺の名前を言つてみる。」

「ジギ様。」

そのネタは今の世代に通じるのだろうか、微妙なラインだ。

「俺は核で破滅した世紀末を生きた覚えはない。」

「冗談よ、契<sup>ちぎり</sup>」

「ふむ……一応聞こう、どうして俺の名前を知つている。」

「んふふつ、病室のプレートに書いてあるじゃない？」

わざとらしい笑顔でそんな事をのたまつ。

とんだ女狐だ。

こちらが気付いているであろう事にすらビビせ氣付いているのだろうに。

「書いてない、苗字しかな。貴様、人の思考を読み取れるのか。」

「……んふつ、頭の回転が速い子は好きよ？」

そう言つて、翼を折りたたみベッドの縁に腰掛ける。

自然に此方に向ける事になつた背中は、翼を出すためなのか大きく開いた作りになつてゐる。

正直。目のやり場に困るし、いらない事にも気付いてしまつ。

まさに前門の虎、後門の狼だ、いやまあ少し違うか。

「下着くらいつけたらどうなんだ……。もとい、そろそろ質問に答える。お前は何者で、俺に何の用だ。」

表情が見えない為に、こいつが何を考えているかが察しづらい。そもそも表情がえた所で内面を悟らせるような易者でもないかもしない。

だが、感じる雰囲気は先程の様な冗談めかしたものではない。

俺はいつしか気付いていた。

自分が、この胡散臭い美女に、人ならざる者に、期待を抱いている事を。

自らの願いを読み取り現れたこの女が、何かを秘めている事を。

そして彼女はこの先の俺の人生を大きく変える取引を持ちだした。

私と契約をしましょ、契。

## 第一幕 第一章 『怒』（前書き）

この物語はフィクションです。  
以下略

## 第一幕 第一章 『怒』

男の叫び声を数えて三つ目、それが自分とリンを追つてきていた人數と一致する。

「リン、そろそろお家に帰る時間だ。」

「えー、リンまだお星様見てたいのに……。」

さつきまで追われていたとは思えない言い草に若干呆れる。

「ふむ……知ってるか？こんな話がある、星も恋も人生も、飽きる一步手前が丁度いい。腹八分目とも言つがな。」

「リン難しい事よくわかんない……けど、お兄ちゃん言つててはづかしくならない？」

純粹な顔をして痛い所を付いてくる子だ。

だが残念ながら恥ずかしいと感じる感情など文字通り持ち合わせてはいられない。

「でもお兄ちゃんが言うならリンそうする！」

そういうて軽い腰を上げ、笑顔で此方に向き直るリン。

どうやら星を眺めている内に機嫌は直ったようだ。

それとも元より拗ねた振りをしてみたかっただけなのか。

小走りで足元にかけ寄るリンの服に付いた埃を払つてやつて、頭を撫でてやる。

すると子猫の様に目を細め、もつともつとと言わんばかりに頭を差し出してくる。

「んふふつー、リンお兄ちゃんになでなでされるの大好きっ。ふむ、世の大きいお友達を敵に回しそつだ。

「良い子だ。」

とだけ声をかけて、その小さな手を取る。

「でも……さつきの怖い人達は……？」

「心配するな、もう多分動ける状態じゃない、と思う。」

「おおー……お兄ちゃんかっこいい……！すばいみたい！」

「スパイか……。」

スパイという言葉に感じる違和感は恐らく今日試してみた実験のソース元となつたとある文献が原因だろう。

色々と小道具を詰め込んだセカンドバッくから一冊の図書を取り出す。

初心者のためのブービートラップ!!

～これで貴方も良く訓練されたベトコンに～

千ページを越える分厚いハードカバーに巻かれたオビには、  
あのベトナム戦争を生き延びた鬼畜軍曹ウイリアム氏が、ついにその血塗られた禁呪をいた！？

などと、現代の若者向けらしくポップ体を黄色く縁取つた文字で売り文句が謳われている。

流石、出版する図書の悪趣味さとその法律すれすれの内容で一時期ネットで話題となつた幽閉社が手掛けているだけある。  
手が後ろに回らない程度に、これまで通り一部過ぎる需要の為に頑張つて頂きたいものだ。

テロの手引き、爆弾の铸造法を記した事で有名な某図書を禁書としたのに、これを禁書にしない理由がまったく理解できないが、こちらとしては愛読者としての位置に甘んじさせて頂く限りである。リンの手を引いて既に暗くなつた校舎の階段をゆっくりと降りる。まだ年端もいかないリンの手を引いている事も理由の一つではあるが、それ以上に彼らが応援を呼んでいる可能性も考えられる。

まあガキ二人追うのに応援を呼ぶ、という彼らの自尊心を傷つけるような行為に、はたして及ぶのかどうかは甚だ疑問ではあるが、石橋を叩いて壊し川を泳いで渡るくらいの気構えを持ってヒュイリアム氏も言つている。

頭の中には良く知つた学園校舎内の見取り図、出口までのルート、および待ち伏せが可能であるうポジションが鮮明に浮かんでいる。

各所ポイントでは、リンを少し待たせ、クリアリングを済ませる。校舎四階の上に位置する屋上から、一階まで階段を下り、正面玄関までのルートを思い浮かべる。

途中には職員室があり、職員室には宿直室があつたはずだ。この学校の深夜の警備態勢は基本、教員が一人。

屋上に居て聞こえた断末魔が聞こえていないはずはないが、教員が見回りをしている様子も無ければ警察のサイレンが聞こえてくるわけでもない。

若干嫌な予感がする。

可能性は二つ。

教職というのはハードな仕事だ。

深夜一時ともなれば教員は眠っているだろうし、断末魔で起きるかどうかはどちらとも言えない。

このパターンならいい。

ただもう一つの可能性、先ほど断末魔の一つが教員の物である場合だ。

つまり一人はまだ行動可能な状態にある場合。

この場合であるなら仲間一人が墜ちた時点で応援を呼ばれていると考えた方が無難だ。

常に最悪の事態を想定して動くならばそう考えて行動するべきだろう。

つまり、ゆつくりはしていられない。

実際に対面しての争いは可能な限りは避けたい。

四階から一階まで下りる過程では今のところ足音を聞いた覚えはない。

恐らくは外か。

この学校は敷地内に表門と裏門の一つ出口が存在する。

それ以外は割と高い塀で囲われており、一人でならともかくリンを連れて出口以外から敷地外へ抜け出すのは難しい。

表門か裏門か。

予測するヒントは残念ながら思いつかない。

「ふむ、リン、表と裏どっちが好きだ？」

リンが急な問いかけにキヨトンとした表情を見せるが、此方が多少焦っている事を感じ取ったのだろう、

「表！」

と、恐らくは直感的にだろう、そつ答える。

頭の良い子で助かる。

俺は笑顔でこう返した。

「わかった、じゃあ裏門から出よ。」

と。

リンが多少驚いた顔をするが、恐らくは考えがあつての事なのだろうと、察してくれたのか、頷いて再び俺の手を取る。

あの女は、リンが俺を敵の元へ導くと言つていた。

つまりリンが望む方向へ進めば敵と鉢合戦をする可能性が高いと言える。

まあ、あくまで可能性。

本当にそのようなロジックがこの限定的状況で働くかどうかはわからぬ。

敢えて言つならジンクスみたいなものだ。

そのまま一階廊下を走るのは足音を立てる意味でも避けたかったため、階段を下りて直ぐの教室に入り、窓から校舎の裏側へと出る。すると少し先にはもう街灯に照らされた裏門が見える。

ジンクスもたまには頼りになるものだ。

裏門には居ない。

リンの手を引いたまま目前の出口へと走る。

裏門から出てしまえばこの辺りは入り組んだ市街地だ、地の利は此方にあるし、何より隠れる場所もいくらでもある。

そう思い、気が緩んだ瞬間だった。

裏門に到達するまであと少しあの所で、足元に違和感を感じる。

「ふむ……。」

無感情にそう零す。

夜中では判別の付きにくい細い糸。  
そこから遠く結ばれた乾いた数枚の木の札が上手く茂みの中に隠されている。

恐らくは校舎裏の「ミミ捨て場に投棄してあつた木材を利用したのだろう。

多少ドロに汚れたそれは糸の振動を敏感に感じ取つてカラカラとやけに甲高い音を立てる。

車通りのある昼間ならござ知らず、夜の住宅街に囲まれた校舎敷地で、音は当然大きく響き渡る。

反射的にリンの手を離してそのまま抱き抱え、全力で残りの裏門までの道を走る。

腕に抱き抱えられ、急な事態に驚いた様子のリンを気遣つている暇はない。

追手が三人共、一度俺達の後を追つてそのまま校舎の中に入る所までは確認している。

これを仕掛けたのは入った時ではない、これは可能性として中に入つてから、外に一人、見張りを出したと考えるべきだろう。

また鳴子を仕掛けるのならば音が鳴つてから獲物が逃げだす前に捕まえる事が出来る位置に見張りがいる事を示す。

誤つて罠にかけてしまった事が確定した教員に心の中で謝罪する前に、見張りに見つかるより早く裏門から出られる事を祈つて全力で走るのだが、どうやらそこまで甘くはなかつた。

後門に辿りついた瞬間、ヒュツツという風切り音と共に、石造りであるはずの壁にナイフが刺さる。

それは狙い澄ましたように足を止めた俺の頭部の進行方向に突き刺さつていた。

「お疲れさん。逃避<sup>バカンス</sup>行はそこまでだぜ色男<sup>ロメオ</sup>。」

多少だが、驚いた。

どんな厳ついオヤジが出てくるか。

そう思っていたが、背後から聞こえてくるのは高く澄んだ女の声だ。ひとまずは抱えていたリンを下ろす。

声の方向へ向き直り、同時にリンを自らの背後に隠す。

「投げたナイフが石壁に突き刺さるような怪力女に色男呼ばわりされるなんてな。良い男なのも考え方だ。まあ生憎売約済みなんだ、俺の事は諦めてくれえ。」

無表情にそう返した俺はちらりと背後のリンを見る。

その表情からはハッキリとした怯えが見てとれた。

そして改めて、正面に立つ女を一瞥し、その意外な外見にまた驚く。若い。

黒いパンツ、黒いタートルネックのセーター、黒いジャケット、黒いニット帽、見えるのは顔立ちと体付きくらいだが、察するに、俺とさほど変わらない歳だ。

顔つきも凜々しく整つており、美人と形容するに何の問題もない。だが、目つきだけは頂けなかつた。

「その目、まるで屍肉をあさるハイエナの……。」

そこまで口にすると足元にもう一本ナイフが刺さつていた。どうやら気は短いタイプのようだ。

「口に気を付けた方がいいぜ。せつかくの色男だ、あたしのナイフがまかりまちがつてあんたのニーを切り落としちまつたら、この先の人生で抱く予定だつた売女が泣くぜ？」

「ふむ、美人は嫌いじゃないが、口汚いのはごめんだな、シモネタは程度が重要だ。」

そう強がつてはみるが、若干俺は焦つていた。

投擲の動作が目で追えない。

明りが極端に少ない状況というのもあるだろうが、それにしても早

い。

女のベルトに括つつけられていた二本の投擲用のナイフが一本に減つていてるのに、足元で音が立つまで気付けなかつた。

「まあいい、長話はあんまり好きじゃなくてね。後ろで大事に隠してるジユリエットをこつちに寄こしな。せつしたらあんたの命だけは助けてやる。」

「ここまでテンプレ、なんてな。」

「口調に似合わず随分とロマンチックな例えを使うんだな、色男に免じてここは見逃してみるのも、歌劇オペラとしては悪くない展開だと思うんだが。」

「はつ、残念だね。あたしはオペラオペラには興味が無いんだ。それがペド野郎オナードの自慰劇ならなおさらね。」

口調がだんだんと強くなっている辺り、大分いらつてきているのだろう。

「気が短い女だな。良い女は男を三年待つてもまだ待ち続けるくらいの堪え性があるものだぞ。」

じつじりと満ち潮のようにせつ上がる女の怒りを察してさらに追い打ちをかける。

「けつ……せつかくの一枚田イチメイドも、舌が三枚あつちやシモ無しだね。いいからやつをとそのチビをよこしな、じゃないと自分の切り離されたナナ二呑ニンえて夜泣きする事になるよ、ファッキンベイビー。」

そろそろだな。

静かに会話を聞いていたリンを少し見て、軽く両手を擡る。

それだけで理解してくれたようで、コクリと頷くリン。

「あーあー余裕だな、ペド糞野郎。あたしと話しての最中に御姫様と内緒話かい?」

「これは失礼、うちの御姫様はヤキモチ焼きでな、他の女と喋つてもたまに甘い言葉を掛けてやらないとへソをまげてしまつのだよ。まあその拗ねた姿がまた可愛……」

「そうかい。死にな、ファッキンペド野郎。」

怒氣を孕んだ声が一転して凍てつく。

来る、狙いは……頭部。

そう確信し、予備動作を極力短くして首から上を左に逸らす。

その瞬間、目で捉えきれない動作で投擲されたナイフが頬を掠めた。右頬に多少の熱を感じると同時に背中を冷たい物が伝う感覺。だが確実に一投目は避わした。

「あたしのナイフを避けやがつただと！糞！ファツク！」

随分とご立腹のようだが、その動搖を待っていた。

リンに話しかけた際、体を捻り気付かれない様にポケットから出した二つの物。

その片方を、俺は顔を逸らすと同時に投げつけていた。

「ちつ！」

叱咤を漏らす女。

暗闇で飛来する物体が何なのか見分けるのは非常に難しい。つまり相手はそれを避けざるを得ない。

それが例え、当たつてどうなるわけでもない小石だったとしてもだ。そして避けざるを得ないという事はつまり、飛来する物体を視覚に捉えていなければならない。

俺は小石を投げると矢継ぎ早にもう一つ、握っていた物体を足元に叩きつけた。

物体は衝撃に反応し、一瞬の強烈な光を発する。

暗闇で少しでも多くの光を得るために開ききつた瞳孔を通った強烈な光は、相手が人である以上、その視覚を一定時間奪う。

マグネシウムの粉末を利用し、癪癩玉の原理を応用したウイリアム先生特製の簡易フラッシュ・シュグレードだ。

サイズが非常に小さい為、夜にしか効果がない、効果範囲が狭い、効果時間が短い、等の制約はある。

音響も出ないため本物のそれと違い相手の意識を奪う事も出来ない。

だが一定時間視覚を奪う事さえ出来ればあとは逃げるのみだ。瞑つた瞼を開き、リンを抱き抱えて校門から即座に飛び出す。背後では女が罵詈雑言を吐き続いているが、そんな事はおかまいなし、一目散に俺は逃げだした。

「お兄ちゃん、やつぱり、すゞいーほんとに、スペイみたいだつた！」

抱き抱えられたリンが興奮した様子で目を輝かせている。

「ああ、スペイかどうかは置いておくがな。あとあまり喋ると舌を噛むぞ。」

走りながらそう答える。

だがリンの興奮は中々冷めない様で、抱き抱えられたまま、俺の首に両手を回してぎゅーっと抱きつく。

「リン、抱きつるのは良いが前が見えない。」

「あつ、ごめんなさい……。あれ？お兄ちゃん、背中濡れてるよ……？」

「ああ、リンを抱えて走つてたらちよつと汗がな。」

「え……でも……、汗よりなんかぬるして……鉄臭い……。」

ふむ、どうやら気付かれてしまったようだ。

「嘘……でしょ……？お兄ちゃん、これ……血……？」

肩に触れたリンの手は俺の血液で真っ赤に染まる。

「ああ、あの女、見えない状態で音だけ頬りに投げたみたいでな、肩に刺さった。」

淡々と、そう答える

リンが触つて手を切つてはいけないと思い、走つている最中にわざわざ引っこ抜いたのがまずかつたらしい。

傷口がパッククリと開いて止めどなく血液が流れだしている。

「嘘……やだつ！おろしてつーお兄ちゃんーーこのまま走つてたら死んじゃう！」

「といつてもな、あいつが何処まで追いかけてくるか分からん以上

は足を止めるわけにもいかない。それにこれくらいじやそう死なん。」

そういういつも若干足がふらついてくるのを感じる。

ふむ、このままではリンを落としてしまうかもしれない。

住宅街の小枝の様に分岐する裏道の一つに入った所で一度足を止め、リンを地面にゆっくりと下ろした。

走っていたので全く気付かなかつたがリンは今にも泣きだしそうな顔をしていた。

「どうしたリン、可愛い顔が台無しだぞ。」

余裕ふつてはいるが、血を流し過ぎたらしい。

足を止めた瞬間、アドレナリンが減少し始め肩の激痛が増す。足元がおぼつかない。

リンを心配させまいと、わざとらしく一休み、と血らり座る様に見せつつ、崩れ落ちるように冷たい壁に体を任せた。

まずい、眩暈がしてきた。

耐えきれなくつたのか、リンが泣き顔で何か叫んでいたが、どうにも何を言っているかよくわからん。

朦朧とした中で最後にみた光景は、懐中電灯の光と、誰のものか分からぬ人影だった。

俺はそれがあの女かもしれないと考えたのだろう、無意識にリンを庇う様に抱きよせ、そこで意識を途切れさせた。

第一幕 第二章 『契約』（前書き）

この物語は以下略。

## 第一幕 第二章 『契約』

先程までの浮ついた熱。

自分が助かつてしまつたという喜び。

両親を殺された事に対する、また喜びを感じる自己に対する怒り。ただ無力な自分に対する哀しみ。

俺の目の前に突然現れたこの女と、話して感じた、久々の楽しいと  
いう感覚。

それら先程まで感じていたはずの全ての感情が、まるで元から無かつたかのように消えうせ、代替として感じるのはただ、冴え渡る思考と一層深まつた夜の静けさだった。

「ふむ……。」

「契約は成立した、でもまだ終わりじゃないわ。あとは貴方が契約を果たすだけ。言つなればこれは前払いね。」

「わかつている。守護を代替として、敵の情報かたきを得る。それで間違  
いなかつたな?」

こくりと頷いた女は先程までより一層怪しげな笑みを浮かべる。嘲笑つているのだろうか。

こつも易々と得体の知れない者との契約を飲んでしまう愚かな人間  
を。

だが俺は悔やまない。

いや、契約後の俺が悔やむ事が出来ないであろう事を予想した上で、  
契約の前の俺は契約を結んだ。

一切の迷いを失くし、己の目的をただ果たすために。

人は言つだらう。

復讐は何も生まない。

復讐なんて意味がない。

そんなのは眞の憎しみを背負つた事の無い人間の綺麗事だ。  
事実世界には争いが溢れている。

ただ、俺が求める復讐がどのような形になるのかは、契約を結ぶ前の俺も、今の俺でさえも分からぬ。

俺はただ、目的として作業的にそれを行う。

未だ嘗て誰が行つただろうか。

憎しみの無い。

いやそれどころか、達成した時の喜び、安堵、哀しみ、その全てが存在しない復讐など。

天使や悪魔でなくとも嘲笑つて当然なのかもしれない。

冴え渡つた頭ですら答えの及ばぬ意味の無い思考を区切り、ただ俺は女に問つた。

それで、その少女といつのは、何処に、何時現れるんだ。

それから一週間後、俺はリンクと出会つた。

氣を使い家に住まわせてくれると言つていた話を断り、事故現場となつた自宅にそのまま住まう事にした俺を、祖父母は止めなかつた。それどころか困つた時には相談しようと、毎月の仕送りまで請け負つてくれた。

俺は表面上に繕つた笑いで、有難うございます、と言だけ告げて、

病院を後にした。

もちろん頭にあるのは復讐を遂げる上での障害をいかに減らすか、というただ一点のみだった。

何よりあの女との契約を履行するのに同居人という存在は邪魔なだけだった。

自宅に戻り、再び玄関の前に立つ。

沸き上がる物はもう無い。

何の感慨も無く鍵を捻り、扉を開く。

既に事故現場の形跡は跡形も無くなつてあり、家中にはただ静寂のみがある。

数日間、人が存在しないだけで家といつのは直ぐに寂れてしまうものだ。

所々に積もつた埃を見て掃除の必要性を感じる。

冷蔵庫の中身も、生ものの類はあやうくなつてゐるはずだ。

幸い春休みはあと一週間程残つてゐる。

家を片づけるのにも、また他の色々な準備をするにも時間は十分にある。

そう、目的に対する、色々な準備だ。

家の片づけがあらかた済んだ時には既に夕方の五時に差しかかるうとしていた。

ちなみに先程の整理で冷蔵庫はほぼ空っぽ状態である。

「ふむ、今からなら業務用スーパーひぐらしのタイムセールに丁度間に合うか。」

業務用スーパーひぐらしとは、夜永家から徒歩五分というお手軽距離にして、酒を含む飲料、生鮮食品、冷凍食品、調味料、お菓子類、雑貨類、果てはペッドフルードまで手広くカバーしている、地域の味方だ。

お値段も主婦の皆様が納得できる物である事請け合いである。

時たま全国最安値！と書かれた商品ポップを見かけるのだが、信用して買つてはいるものの実際最安値を記録しているのかどうかは定かではない。

ひとまず夕飯の食材を買いにひぐらじへ向かう。

家の前を伸びる街路を東へ。

大通りに出たら北へ向かつてまっすぐ進めばもうひぐらしだ。

ちなみに大通りを挟んで向かい側にコンビニが見えるが、いかんせんひぐらしに客を持つて行かれるのか、余り繁盛はしていない様子だ。

近所の学生は割と利用しているようだが、学生の財布などたかが知れていいる。

学生による万引きと売上、どちらが上かという所だろうか。

店主も人のよさそうなおっさんで、監視カメラモニターを熱心に見詰めているかと思えば、実際は野球中継を見ていたりする様な人である。

それは万引きも増える事だらう。

ちなみにこの辺りは余り治安が良しくない。

夜は必ずと言って良いほど酔っ払いの怒号が聞こえて来るし、警官も毎夜見回りをしている。

そんな中で我が家の事件があつたのだ、スーパーで奥様方は噂話に必死のようだつた。

当然、俺がスーパーに入ると少なからず視線が集まる。

まあ特に何か感じいるものがあるわけでもないので、目的の商品をテキパキと籠に放り込む。

ヒソヒソと周りの声が聞こえる中、誰かが俺の肩をトントンと叩く。振り向くと、母親と良く世間話をしていた近所の叔母ちゃんが立っている。

化粧氣の無い、人好きのしそうな人で、昔は良く飴などくれたものだ。

「「じぶさたしています。」

無表情にそう言い軽く頭を下げる俺に、何か雰囲気が変わった？などと心配そうに声を掛け、御悔みの言葉と、困つたら何時でも相談しろとの内容を告げると複雑な面持ちで清算に向かっていった。愛想笑いの一つでも返しておいた方がよかつただろうか。

無表情でも当然と言えば当然なのだろうが、過度に心配を掛けるのは度を越した干渉を招き、目的の進行を阻害する可能性もある。清算を終えた俺は周りの人間にに対する対応パターンを考えながら家への帰路に付いた。

しかしふと気付く。

スーパーを出た頃だろうか。

誰かが、自分の後ろを付いてきている事に。

幾つかの可能性を考慮するが、思いつくのは「近所さんよりも例の神父の仲間である可能性だ。

俺が一番気になっていたのは何故俺の両親が殺されたのかという事だ。

警察が口にしていたのは、形跡から物取り目当ての犯行ではないとの事と、実は最近この界隈で通り魔殺人が数件起こっているという事。

だが、その犯行はどれも路上で行われており、押しかけ殺人という形で、それも真昼間からというケースは稀に見る物だつたらしい。もし、何らかの目的を持つて両親を狙つていたとするなら、俺を再び狙つてくる可能性もあるという事。

だとすればこれは好機だ。

俺は大通りから小道へ右折する曲がり角で、一度小道に姿を隠す。恐らく相手は俺の家を知っている。

ならば曲がり角を曲がった後も直進してくるはずだ。顔を確認して、怪しい様なら即行動に移す事も考慮に入れ、先ほど鞄に入れておいた果物ナイフを確認する。

数十秒すると、「ンンン」とコンクリートを踏む音が段々と近付いてくる。

影は日の光が相手と対面であるため見えない。

小道の電信柱に姿を隠したまま相手が出て来るのを息をひそめて待つ。

しかし、最初に見えたのはヒラヒラと揺れる白いワンピースの裾だつた。

そして予想していた高さよりかなり下に、恐ろしく整った顔立ちが現れた。

「女の子…？」

ふと頭に過ったのは女と交わした契約だ。

これから近いうちに、お前の前に少女が現れる。それはもう間違えよつのない程に美しい銀髪の少女だ。お前にはそれをただ護つてもういい。

歳は十歳前後といった所だろうか。

外見は……確かに、見紛う事がないレベルだ。

それに銀髪の女の子なんてそういう話るものじゃない。

少なくとも俺は初めて見た。

日本人の顔に銀髪なんて似合ははずもない。

だが多少ハーフを思わせる様な凜とした顔づくりに、作り物とは違う一本一本が絹糸の様な光沢を持つ髪はこれ以上も無く映えていた。俺が潜む小道の前を通り過ぎた女の子は小鳥の様に忙しなく辺りを見渡しながらその先、自宅に向かっていく。

それにもしても、この辺りの治安の悪さを鑑みると、こんな小さな女の子に独り歩きをさせるとは、あの女いつたいどういうつもりだ。小道から出た俺は、通り過ぎた少女の後を追う、が同時に違和感に

も気付いた。

普段ならこの時間帯、この通りは夕飯の買い物に出る人々である程度人通りがあるはずなのだが、少なすぎる。

ふと目に入った通路の突き当たりに止められた、見慣れない黒塗りの高級車。

視線を戻せば少女は何かのメモと家の表札を何度も見比べている。間違いはない、だが余裕もないな。

早歩きで少女に近づいた俺は、

「取り合えず話は中でしよう。」

そう囁き掛けで女の子の手を優しく取り自宅の鍵を開け中に入れる。いきなり驚きを隠せないままに手を取られた女の子は俺の不出来な笑顔を見てどう思ったのか、ひとまず黙つて頷き、成されるがままに我が家への敷居をまたいだ。

自宅に入った俺はひとまずローンロックを含めた全ての鍵を掛けた。

そして一度しゃがみ込み女の子と視線の高さを合わせた。前何処かで読んだ子供に対する対処法だ。

正直半信半疑だが、やらないよりましといった所だろう。

「名前は？」

「ふえつ？えと……えと……。」

どうやら余り効果が無かつたのか、それとも俺の無表情が怖いのか、帰つて来るのは戸惑いのみだ。

「ふむ……。」

行き成り名前を聞くのは不躾だつただろうか。

何より子供の扱い等、本で読んだ中途半端な知識があるのみで、あとはてんで素人である。

しかも状況が状況。

もしこの少女があの女の言う少女でなければ、あつといつまに警察のお世話になつてもおかしくない。

改めて少女を見る。

十前後の子供にしては整い過ぎた顔立ち。

腰元まで伸びる美しい銀髪は揺れる度に鈴と鳴る様な錯覚を抱かせる。

しかし今その表情は硬く、怒られた後の子犬の様で、視線は落着かず低空飛行、おまけに両手は腰の前で組まれている。

その動作、仕草から受ける印象は、不安。

俺にそういう感情事体を理解する事は出来ないが、子供が不安を抱きやすいというのは理解できる。

そういうえば、と先程の買い物した袋の中身をガサガサと漁る。

「あつた、いるか?」

そういうて取り出したのは一本のスティックキャンディーだ。ゆつくりと、少女の前にそれを差し出す。

「……うん。」

そう返事し、おずおずと飴に手を伸ばす女の子。

俺は女の子の頭の上にポンと手を置いて、ゆつくりと撫でる。

「取り合えず今は何も聽かん。お前がしたいよつこじひ。だから、話したくなつたら色々と事情を話してくれるか?」

「……うんつ。」

先程とは違い、ある程度直ぐに帰つて来た返事。

表情もいくばくか和んだ様だ。

頭を撫でられて撫つたそうに田を細める女の子を見て、俺は無言で頷いて腰を上げ、リビングへ向かう。

「何時までも玄関に居るわけにもいかん、こつちでゆつくりしないか?」

背後に向かつて声を掛けると、トテトテといつ足音が聞こえる。

そして今更に気付く。

少女の頭を撫でている時、自己の意識とは関係なく、余りも自然な、『作り笑い』を浮かべていた事に。

「リン。」

彼女がそう呟いたのは俺が夕食を作り終わって二コースを眺めながらお茶をすすっていた時だった。

「名前か？」

「うん。」

先程のステイックキャンディーを咥えながら、なんとも言い難い表情で二コース番組を眺めるリンと名乗った女の子。

「良い名前だな。」

そう答えるとリンは初めて俺に、その鈴の音色のよつたな笑顔を見せた。

ああ、確かにこの笑顔は名前にぴったりだな、と思つ。

苗字は何なのか、何処から来たのか、親はどうしたのか。

聴きたい事は山程あつたが、それはひとまず飲み下し、俺はリンを夕食へと誘つた。

それが計つたようにリンのお腹が小さく鳴ると同時に、少女はにかむよつたな笑顔を浮かべた。

さて、今日の夕食のメニューはまさか女の子を拾つとは思つていなかつたために割と質素なメニューとなつていて。

といつても、炊き立ての白御飯、湯気を立てる合わせ味噌の味噌汁。ここに塩鮭の焼き物とキュウリの漬物。

これだけあれば日本人は生きていけると言つても過言では無いと思う。

ふむ、朝食のようなメニューになつてしまつた。

そんなありふれたメニューを眺めるリンの目はまるで初めて見る食べ物を前にしたが如く、輝いていて、うあーと開ききつた口からは若干涎が垂れかかっている。

「おい、涎。」

「つへ！？うわわつー。」

無意識だつたのか慌てるリンの口元を暖かい布巾で拭いてやる。するとリンがじーっと此方を見つめて来る。

お預けを喰らつた犬の様な顔をしている。

「なんだ？」

「……食べていいの？」

「俺が一人で食うには皿が多いと思わないか？」

「わかんない、もしかしたら両手を使って食べる人なのかもしけない……！」

「残念ながら両手で箸を使えても口が一つしか無いからな。」

「そつかなるほど……！じゃあ、頂きますっ！！」

「そういえば若干ハーフの様に見えるが、箸は使えるのだろうかと、少し気になつて見つめてみる。」

「んむんむ、じゅるじゅる、ポリポリ。」

見事な箸捌きだつた。

「箸、使えるんだな。使い方も綺麗だ。」

「んむつ？……じつくん。」

「ああ、別に急いで答へんでいい、良く噛んで食え。」

「もう飲んじやつた。よくわかんない、けど使えたつ。」

「ん？親から教えてもらつたのかと思つたんだが違つたのか。」

「うん、パパもママも誰かわかんない。」

まずい事を聽いたのだろうか。

丁度いいから今聽いてみるか。

「いないのか？」

「うーん、わかんない。覚えてないの。」

あまり考え込んだ様子も無く答えるリン。

「覚えてない？どこから来たのかとか、そういう事もか？」

「うんつ。リン気付いたら人がいっぱい居るお店の前に立つてたの。」

覚えてるのはメモのお家に行くつて事くらい？」

「そう言えれば、リンは出会つた時あのメモ一枚しか持つていなかつた。ふむ、よくわからんが、まあいいか。」

「そう言って俺も自分の分の食事に箸を付ける。うむ、今日の味噌汁は良くできている。」

味噌汁はやはりおあげとネギと豆腐の味噌汁に限る。

そんな俺の顔を不思議そうに見るリン。

「……いいの？」

「何がだ？」

「ふつうのひとは誰か知らない人をお家にあげたりしないんでしょ？」

「まあ普通の人はな。」

「それにリン、名前もまだ聞いてない。」

「俺の名前は夜永 契だ。」

「ちぎり……？」

「ああ、ちぎりお兄ちゃんとでも呼んでくれ。」

「うーん……。」

考え込む事の多い子だ。

俺は気にせずに鮭の切り身と御飯を口に運ぶ。

塩鮭と白御飯の相性はどうしてこんなにも素晴らしいのだろうか。

「ちぎりお兄ちゃん、パパ……？みたい。」

「覚えてないんじやないのか？」

「うーん……、でも何だかそんな感じがしたの。」

「ふむ……」

「パパって……呼んでもいい？」

上目遣いでそう問われる。

パパか、何か色々問題があると思うのだが、取り合えず今は呼びたい様に呼ばせておくか。

「まあ、取り合えずはそれでもかまわん。」

それにきっとどこかで、父親を求める子供心といつのがあるのだろう。

とりあえず自分をそう納得をせるのだった。

さしあたっての問題が、呼び名なんて物では無かったこと、俺は食器の片付けを終えた辺りで気付いた。

「リン、風呂沸いてるから入つてこい。」

「わかつたー。」

とてとてとお風呂場に向かつていくリン。

生活に必要な個所については既にリンには教えてある。だが誤算だった。

「パパ……入らないの？」

リビングの扉から少しだけ顔を出してそう聞くリン。

まず頭を過つたのは赤い回転灯を付け大きな音を鳴らす白黒の車だ。だが傍目から見て、見ず知らずの女の子を自宅に連れ込んでいる時点での琳は通り過ぎているだろ。それに見るからに琳はまだ子供だ。

「一人で入れないのか？」

一応、最後の抵抗として尋ねる。

「多分……入れるけど……怖い……。」

まあ、世の中には中学生になつて一つ違ひの兄妹で一緒にお風呂に入つているような奴もいる。

それほど大きな問題じやないか。

結局はそう甘んじる事にした。

「しようがないか。ただ、基本は一人で入れるように慣れるんだぞ。」

そう答えると、琳は花の咲くような笑顔でお風呂場へと走つて行つた。そう、女の子と一つ屋根の下で暮らすのだ。

こういう事がこれからも多々あるかもしれないという事を余り考えていなかつた。

まあ、当然の事ながら、未成熟で無邪気な琳の体に対して俺が何か邪な感情を抱く事は無かつた。

正直言つて、琳は可愛い。

もしも反応してしまつたらストレートに生理現象だと説明して良い物なのか、多少だが真剣に悩んだのは杞憂に終わつたというわけだ。

風呂からあがり、ソファーでリンの髪の毛を乾かしてやる。

こつしていると一五歳にして本当に一児の親になってしまった様な気になつて来る。

周りから大人びていると言われた事はあるが、それは物心ついた時からの割と無感動な性格と歳の割にはずんずんと伸びてしまった身長のせいだ。

自分でも同じ年と比べれば割と達観した方ではあると思つては居るが、それでもまだ人生の経験不足を補う事が出来ないのは口に出して言つまでも無い。

「パパっ、髪乾かすの下手っ！」

「む、すまん。」

こつこつのはドライヤーを少し離して当てながら髪を適当にがしがしとやれば乾くとだけ考えていた俺に、その言葉は嫌に深く突き刺さつた。

何だろ、この敗北感。

男としての何かを大きく抉られた様な気がする。

「不慣れなんだ、どうすればいいか教えてくれるか？」

「うんとね、もうちょっとだけ優しくして？」

そう上目遣いで言われ気付く。

この子はまだ世に出しては危険だ。

色々な意味で。

天然というか、穢れを知らなさすぎるというか。

この歳にしてこつも誘つているような、女の香りを匂わせる仕草を身につけていとは、何とも末恐ろしい。

俺が色々と欠落してしまった人間でなければ多少危なかつたかもしれない。

ときに、季節はもう春とはいえ、気候はまだ若干の冬を残している。余り薄着では風邪をひいてしまつし、残念ながら女子用の寝間着など用意できなかつたため、何故か俺のクローゼットの奥深くに合

つた鳥類を模したきぐるみのよつうなパジャマをリンには着せている。のだが、どうにもそのチョイスがリンの破壊力を増幅している節があつた。

「 じうか？」

先程までと違い、手櫛で髪を軽く梳くよつうにして流しながらドライヤーの風を当てる。

どうやらそれでお気に召したらしく、頭を撫でられた時の様に目を細めて大人しくするリン。

髪を梳くたびにシャンプーの香に混じつて不思議な香りが鼻腔を撫でる。

金木犀の様な、干したての布団の様な、何とも形容しがたい香りだが、間違いないのはその香りで多少心安らぐ自分が居る事だろうか。同時にこの感情は危ない物では無いのだと、自らに機械的に言い聞かせ、髪を乾かし終える。

「 リン、大体終わつたぞ。」

「 .....ふみゅう .....。」

「 リン.....？」

気付けばリンは人の葛藤など知る由もなく、座つた姿勢のままで眠つてしまっていた。

天使の様な寝顔、といふには少々涎が垂れて来ている。

ティッシュで軽く口元を拭いてやり、一階の自分の部屋のベッドまで起こさないよう慎重に運ぶ。

流石に亡くなつた両親の部屋に寝かせるのは気が引けたのだ。そして俺は自分の部屋の床に布団を敷いた。

寝る前に家中の電気とガスのチェック、そして戸締りの確認を忘れない。

最後になつた自分の部屋の電気を消し、自らも床に就く。

だがその前に、リンの寝顔をチラリと除く。

これから一緒に生活する以上、恐らくは面倒な事が多々続く事だろう。

それはきっと俺が普通の人間なのであれば、例えようのない楽しい日々になつたのだろう。

今日は中々、永い一日だった。

明日の事は、明日にならなければ分からぬ。

樂天的、というよりは無感情な思考放棄といつべきだらうか。

目的を忘れてはならない。

そう、あくまで、俺はこの小さな女の子を、護るべくして家に招いたのだという事を。

この半日の平温なんて序章に過ぎないのだといつ事を。

第一幕 第四章 『回想』（前書き）

」の以下略。

## 第一幕 第四章 『回想』

「パパ……暖つたかい……。」

あ、ありのまま今起こったことを話そう。

朝起きたら、俺の隣に幼女が寝ていた。

な、何を言つているのか分からないと思つが、俺も何を言つているか良く分からない。

頭がどうにかなりそうだった。

JKとかっことかそんなチャチなもんじゃ断じてない、もつと恐ろしいものの片鱗を味わつたぜ。

つまり何が言いたいのかと言つと、俺は頭が悪い。

違う、間違えた。

もとい、俺は寝起きが悪い。

というよりは、目覚めた瞬間の判断力が著しく低下する傾向があるのだ。

つまり、昨日の夕方例え自ら少女を家に連れ込んでいたとしても、そのまま一緒に夕食をとつていたとしても、そのままお風呂に一緒に入つたりしていたとしても、その内容を朝目覚めたこの一瞬だけは完全に忘却していくしかもあろうことか若干動搖してしまったという事だ。

ああ、思い返してみれば、俺はもう桜田門のお世話になつても文句が言えない立場に居るのだ。

何せ寝ぼけ眼でもにむに言つている目の前の生物は俺が例え色々と欠落している人間だとしても危険だと判断できるレベルの愛くるしさを内包している。

世の大きいお友達、もとい童貞諸君ならば朝立ちしたイチモツをそのまま沈めに掛かろうと考えてもそれはそれで致し方ない事なのかもしれないと思えてしまつ程だ。

ああ、俺はいつたい何を言つてゐるのだらう。  
とりあえず落着こう。

まだまだろみから抜けきれない俺は、いつの間にかベッドから降りて布団に潜り込んでいたリンを起こさない様に、静かに立ち上がる  
と、洗面所に向かい顔を洗つた。

時計を見ると時刻はまだ朝五時半。

今日の予定を考えれば若干早過ぎる時間だと言える。  
まずは昨日寝る前に洗濯機に放り込んでいた洗濯物を氣だるい頭で  
覗き見る。

衣類の中には普段見慣れない縞々の三角形の布つきれだとか、純白  
のワンピースだとがが入つていたが、そんな事は氣にするべき事項  
ではない。

思考を置き去りに習慣で身に付けた反射によつて衣類をそのまま乾燥に放り込んでいく。

亡き母が悩みぬいて購入したこの乾燥機は、大容量の衣類を労わり  
つつも太陽の元で干すのと変わらないような仕上がりにしてくれる  
と評判の逸品である。

と言つても、昨日帰宅してからの洗濯物なので一人分+、大した  
量ではない。

放りこみ終わつたらスイッチを押してあとはコトコト三十分待つだけである。

俺は一先ず自分の部屋に戻り、クローゼットから黒のトレーニング  
ウェアの上下を取り出す。

ちらりとリンの様子を見るが、まだぐつすりで起きる様子は無い。  
ここで着替えるも問題ないか。

ささつとトレーニングウェアに着替えて俺は家を出る。

軽くアップを済ませ、いつも通りの決まった道筋を、いつも通りの  
一定のペースで走る。

入院している間ご無沙汰だったので、いつものペースを維持するの

が若干辛く感じるが、少し無理をしてでも元の調子に戻しておかなければならぬ。

リンが来た以上、あの女の言つとおりな「ぱ」れから色々と面倒事が起ころはすだからだ。

三月の朝、冷えた空気が頬を切る感覚が熱くなつてきた体には心地がいい。

三十分程掛けでいつもの決まったコースを回り、家が近くなつてくるとやはりあの光景を思い出してしまう。

だが、思い出すだけで特に込み上げる感情など無い。

それは、自らが選択した現在であり、捨て去つた過去であるとも言える。

目的を果たす、ただその一点に口を集約するために。自宅に戻ると時刻は六時を過ぎていた。

リンはまだ眠つてゐる様で、足音は聞えない。

一先ずシャワーを浴びて汗を流し着替えを終える。

既に停まつていた乾燥機の中身を取り出して、折りたたんだら次は朝食の準備だ。

こつして居るとリンが俺をパパと呼ぶのも何となく頷ける気がしてしまつ。

実際の所、父と母は仕事で家を空ける事が多かつたので家事全般は自分でこなす事が多く、手順は慣れたものだ。

今日の朝食は昨晚の味噌汁、ベーコンエッグと付け合わせにレタス、白い御飯も勿論欠かせない。

味噌汁を温めると、いつも通りの朝の香が部屋に立ち込める。時刻は七時を少し回つた頃だらうか。

「そろそろ起こすか。」

「誰を起こすの? リンが起こしてよいか?」

「いやなそろそろリンを……」

「リンー? 私?」

あれ。

「お前いつからそこへいたんだ。」

「気が付いたらリンは食卓についていた。

「さつきからー！」

「さつきがいつかはわからんがまあいいか、朝飯にするぞ。」

「うんっ！」

ふむ、色々と調べる事がある見たいだな、気配の察し方なんて文献があるかどうかは知らんが、探してみる価値はあるかもしね。他にも色々と目処を付けている文献がある。

これから色々と荒事の渦中に立つかもしれないのだ、準備をし過ぎて困る事は無い。

今日もまた、永い一日になる事だらう。

「はつはつ、はつはつ。」

「つづつうつづ、うーつー！」

まあ予想通りというべきか、その日の内にこいつして黒服の変態が編隊を組んで襲つてきているわけだが。

どう変態か、と問われれば、俺はともかくあいつらの目的は恐らくリンだ。

幼女を大人三人がかりで追いかけまわすなんて変態の所業としか思えない。

時刻にして深夜零時。

鬼ごっここのスタート地点は我が家の玄関だ。

今日一日、まずリンの服を調達後、図書館で色々と調べ物、その後専門店でちょっとした仕掛けの調達を済ませた。

その後自宅に戻つて夕食を食べ若干の作業をしたまではよかつたのだが、夜の散歩がてらコンビニまでデザートを買ひに行こうと出かけたのがまずかった。

やはり子供は夜九時には眠りに就かせるべきだつたのかもしない。家から出た所に丁度我が家を見張つていたらしい黒服三人と遭遇。始まつたのがこの鬼ごっここというわけだ。

正直、リンを連れての追いかけっこは分が悪い。

今の所は地の理を生かした攪乱目的の道をたどる事である程度距離は離しているが、このままでいすれは追いつかれるだろう。

「うええー……、リン疲れたよう……。」

リンもこの様子だ。

どうしようかと思惑に耽る俺の目に入ったのは見慣れた校舎だった。ふむ、丁度いいか。

「お姫様、ちょっと失礼しますよ。」

俺は返事を待つ事無くリンの体を抱き抱え、そのまま校門を飛び越える。

後ろでは黒服三人の追つてくる足音が未だに聞こえている。どうやらこのまま校舎に隠れてお終いというわけにもいかなさそうだ。

丁度試してみたかった事もいくつかあったので彼らには実験台になつてもらつ事にしよう。

問題はまずどう仕掛けの時間を稼ぐか。

こうして今夜この校舎は、俺の実験場へと姿を変えたのだった。

「クソツ、クソツ、クソツ！」

あのペド糞野郎、生意氣だ。

そう感じたのは奴らを追いかけ始めて三分もしない頃だった。

こちらは三人。

相手はチビ餓鬼を含めた一人。

追いつけないはずがないのだ。

だが、道々で此方の先を読む様なルートを各種フェイントを入れて選択してくるためになかなか追いつく事が出来ない。

それどころか距離を離されている節がある。

確かにここに派遣されてまだ数日、地の利は間違いなくあちらにあるとはいえ、こうも手玉に取られているようだと、だめなのだ。

抑え切れない、怒りを。

アタシには、怒り以外の感情が存在しない。

それは、『とある悪魔』との契約で、驚異的な身体能力を得た代償に怒り以外の感情を支払ったからだ。

だがアタシは後悔していない。

それどころか、むしろ力を手に入れた上で余計な感情を取り去つてもらえた、アタシにとつての一石一鳥の取引だつたと思っている。何より、この力は素晴らしいものだ。

もう身寄りが居ないアタシがこの組織で、『悪魔の枝』（ミストルテイン）でやつていけるのもこの力があるからこそだ。

そう、アタシがここに居る為にも、アタシがアタシであるためにも、さつさとあの糞肉たらしい餓鬼をとつ捕まえなければならないのだ。

「おいエンジェル、ぼさつとするな、標的が学校に逃げ込んだぞ。」仲間の一人、禿頭の男、ジニーが思案にふけつっていたアタシに声を掛ける。

アタシは人に指図されるのが大嫌いだ。

「てめえに言われなくともわかつてんだよ禿つ！ 次アタシの事エンジェルなんて呼びやがつたらケツの穴にアタシのナイフぶち込んでやるからな！」

アタシはアンジェ。

アンジェはこの組織に拾つた野郎が勝手に付けたコードネームだ。

怒り（アングリー）をもじつたこの名前をアタシは気に言つていて。

だが皮肉を込めて、仲間はアタシをエンジェルと呼ぶ。

本当に、考えたついた野郎をぶつ殺してやりたいくらいに氣の効いた皮肉だ。

だが今はそんな事よりも、目の前の獲物を狩つて、怒りを鎮めたい。随分とコケにしてくれた代償は高い物になりそうだ。

殺さない様、自分を抑えなければならない。

標的に一步遅れて校門から侵入する。

まず前衛、短髪の男、トロイが侵入後、役割として安全を確保する。次にジーーが侵入し敵を威嚇、そこをアタシがしとめる。

それがアタシらの基本陣形だ。

だがまずトロイが侵入する時点で声を上げた。

「なんだこれは……。」

校門を越えた先に広がっていたのは、一言で言つなら煙だった。

視界いっぱいに広がる煙。

夜間、街灯に照らされた白煙で校舎入口への視界はほぼゼロの状況だ。

所々でオレンジ色の光が垣間見える所を見ると、恐らく発煙筒を使つたのだろう。

「油断するなつ、逃げる時に見せていたあの動き、あのガキは普通じゃないぞ。」

リーダーであるジーーが警戒を促す。

「「ウイルクッ。」」

トロイとアタシは義務的に返事をする。

ちなみにウイルクとはWill comityの略で、命令に従つ、という意味を表す。

考えなしに煙の中を進むのは危険だが、おちおち逃がすわけにもいかない。

三人で三方向を警戒しつつ、校舎に侵入すると煙も流石に届いてい

ない様子だ。

だが奴らの姿はない。

大方予想通りというべきか、発煙筒はただの田くらましだった様だ。

「トロイは俺と中、アンジエは外で警戒。いいな？」

「ウイルクッ。」

「ざつけんな！アタシが中だ！」

「落着けエンジェル、今のお前じや標的を殺しちまいそうだ。少し  
外で頭冷やしてろ！」

「この糞禿、またその名前で呼びやがつたなつ！糞つ、外に出てき  
たら覚えてろ！」

「ウイルク。」

片目を瞑つて軽くワインクして去つていぐジニーの後ろ姿を見てナ  
イフを投げつけたい衝動を抑える。

あの糞禿、気持ち悪いワインクなんぞ残していきやがつて。

もちろん、外で待つと言つても休んでいて良いわけではないのは分  
かっている。

その時自分が出来る最高の仕事をしろ。

それがジニーの口癖だ。

アタシはアタシの出来る事をしよう。

そしてこの後、校舎からジニー、トロイ、そして知らない男の悲鳴  
が聞こえ、アタシは人生で一度目の敗北を味わう事になるのだった。

## 第一幕 第五章 『回帰』

俺はただ闇を見据えている。

ただ何もない、虚無の暗黒だけが広がっている光景。

夢、希望、期待、理想、全ての望みはここには存在しない。

俺はそれでもただ虚無の空間を見据え続ける。

いつか誰かが言っていた。

真っ直ぐ前を向け、そして田を逸らすな。

田を逸らして見えて来る物は本当に「己」が望む物ではない。

「そんな事は言わねなくても分かっている。」

絶望の闇の中、俺はただ闇を睨みつける。

自らの力で、何かを見いだせる其の日まで。

手が掴まれる。

ふと意識を取り戻した俺は見覚えの無い光景にまた寝ぼけているのかと考える。

だがそれはいつものまどろみではない。

なぜならはつきりとわかるからだ。

小さな手が、俺の手を力強く握りしめているのが。

「リンク。」

傍らに田をやれば、銀髪の少女が俺の手を握ったまま眠りこけて

いた。

上半身裸でベッドに寝かされた俺の背中にはいつのまにやら包帯が巻かれ、痛みが引いている。

部屋を見渡す。

清潔感のあると言えば聞こえはいいが、言つてしまえば空虚な部屋が広がっている。

全体的に物が少ないのだ。

一台の机には本立てがあり、そこに数冊の本、あとはベッドがあるだけ。

その本も教科書類だけのようだ。

淡いグリーンのカーテンがかかる窓を見ると外はもう明るくなつていた。

日の具合から推測するに、もう昼間になろうという所か。立ち上がろうと思つうが、手を握つたまま離さないリンを引き摺る事になつてしまつと考へるとそれも躊躇われる。

手を離そつか否か考へている内に部屋の扉が開いた。

「あらあら、目が覚めたんですね。」

そう言つて姿を見せたのは一人の女性、いや女の子か。歳の頃は俺と同じか少し上といつた所だろう。

大人びた落着きのある雰囲気、理知的な瞳がブルーフレームのアンダーリムグラス越しに優しげな視線を送る。

途中まで三つ編みで一本にまとめられた長い黒髪は左肩から前へ柳の様に流れている。

暖かな色合いのカーディガンを押し上げるのは眼を見張る飽満な胸。

その割に細い腰はさらにその果実の重みを強調している。

外見だけ見るならば一番適した例えは聖女だろうか。

「どうにも世話になつたみたいだな。礼を言おう。」

「どう致しまして、私はただその女の子のお願いに答えたに過ぎませんが。それに私如きが他の方のお役に立てたという、それだけ

で私は幸せですから。」

そう微笑みながら言う彼女の顔には欠片の含みも見られない。本心で言つているとしたら希少を通りこして絶滅危惧種レベルの善人だ。

「それに、感謝するなら私よりもその子にしてあげてください。私が処置した後も朝方まで起きていて貴方の手を握り続けていたんですよ？本当に優しい子だと思います。」

そういうて彼女は俺の隣でむにやむにやと眠るリンの頭を優しく撫でた。

「んみゅう……パパ……もつと……。」

そう寝言で呟くリンに、あらあらと微笑む聖女はパパといつ発言には触れてこなかつた。

説明すると面倒な事になるので非常に助かる気遣いだ。

「差支えが無ければ名前を教えて貰えないか？」

「私ですか？私は希理子きりこ、渚なぎさ 希理子と申します。覚えて頂けるなら幸いです。」

多少の恐縮を含めた笑顔で希理子は答えた。

「希理子、か。恩人の名前だしな、せつかくだし覚えておこう。」

「ふふつ、恩人だなんて……嬉しい。それならお礼に、というのも変ですが、貴方とこの子のお名前を教えて頂けませんか？」

「ああ、俺は夜長 契。この子の名前はリンだ。聽かなかつたのか？」

「ええ、治療に必死でしたから、つい聴くのを忘れてしまいました。リンちゃんも、契さんをずっと心配していて聴ける雰囲気ではありませんでしたし……。リンちゃんは契さんの事を本当に大事に想つていらつしゃるみたいです。」

俺は微笑ましくリンの寝顔を見つめる希理子に釣られてリンの寝

顔を見る。

こんな傍で話をしていても起きる気配は一向にない。

「ふむ、実は俺もリンと会つてまだ間もないんだがな。」

「ふふふ、それはきっと契さんに不思議な魅力があるからですね。」

「魅力？俺にか？」

人として必然である物すら足りていらない俺に対する評価としては斜め上を狙つた物だと思う。

「契さん、自分にはそんな物ない、なんてお考えですね？」

「ん？口に出ていたか？」

「いいえ、でもお顔を見ていれば何となくわかりますよ。」

そう嬉しそうに笑う希理子を俺は見つめた。

慈しみに満ちたその目を見ていて俺は漠然とした違和感を覚えた。何だろう。

恐らく俺とは似ても似つかぬ種類の人間であるはず。

だが何故か似た匂いがする。

俺と同じ、何かが欠けているような。

ハツキリとした理由も無い感覺。

この感覺は何処かで感じた事があつた気がする。

何処かは思い出せないが、ごく最近の事だ。

「さて、朝ご飯、というには大分遅いですが、簡単な食事を用意してあります。良かつたら召しあがつてください。」

希理子の申し出に思索を打ち切られた俺は、いつも通りの思考放棄で頭を切り替えるのだった。

希理子が部屋に食事が運んで来ると、予想通りその香りにリンは眼を観ました。

「いいにおいする……お味噌汁のにおい。」

「あら、お姫様のお目覚めみたいですね。」

「お姫様と「よりはこの田舎め方だと冬眠明けの熊だろ?」

「そんな酷いつ、うふふ。」

自分の事を言われているのだと気付かないリンは、我関せずと言つた様子でお盆の上の焼き魚に眼を奪っていた。

「リンちゃんの分は下に用意してありますから。」

という希理子の言葉に明らかに不満を浮かべるリン。

というのも、お腹は減っているが俺から離れたくないらしい。

「リン、お兄ちゃんと食べたい……。」

「どうか、じゃあ俺のを分けてやる。」

効率的に考えその結論に至ったのだが、リンは首を勢いよく横に振つた。

「お兄ちゃんは怪我してるんだからちゃんと食べないとダメなのー。」

と、片意地を張るリン。

「あらあらうふふ。」

と、また笑みを浮かべる希理子。

最終的には俺が十分に歩ける状態だったため三人で一階に下りて食事する形となつた。

食事中は食べるのに必死なリンを置き去りにして俺は希理子と会話をする。

「見事な和室だな。」

「有難う」やります。といっても祖父の趣味と言いますか、家事体も相当古くからある物なので、そのための必然と言いますか……、でも私も自分の部屋よりこのお部屋の方が気に入っています。」

部屋全体をいとおしむ様に眺めてそう答える希理子。

一階にあつた希理子の部屋は如何にも現代建築といった風の部屋だったのが、一階に下りてみればそこは古き良き日本建築、といった情緒溢れる畳敷きの造りになつていた。

今食事を取つてゐるのも畳に座布団と卓袱台を並べた和室で、手

入れの良く行き届いた障子と壁に囲まれた落着きある雰囲気の部屋である。

障子を開ければ今では余り目にしなくなつた縁側から、丸石に生えた苔も風情を醸し出す日本庭園が広がつていて、こちらもよく手入れされていて、猪齧しが石を打つ音が時たま響くのが何とも言えない情感を醸し出している。

「一階は増設したのか？それに立派な家で手入れが良く行き届いている割には余り人の姿を見かけないな。」

「一階は母の趣味と言いますか、和より洋を好む方だったのでも、お言葉の通り増設された物です。人が居ないのはここが離れだからですね。庭園を少し歩くと本宅があります。そこに祖父母が居を構えていらっしゃいます。」

母についてのぐだりが過去形だったのが多少気になるが、本人の表情には微かな変化も見られない、さして口を挟む事でもないだろう。

「これで離れか、随分とお嬢様に拾われてしまつたみたいだな。」

「そんな、ただの田舎娘ですよ？」

笑いながら口元を押さえる仕草も上品だ。

礼儀作法もしっかりと仕込まれているのだろう。だがそんな事より気になる事が一つあった。

「所で、失礼な事を承知で聴かせてもらつが、その胸は本物なのか？もはや違和感を感じるレベルのサイズなんだが。」

至極真面目な顔をして問う俺の発言に、空気が一瞬凍りついた。リンは行き成りの上にあんまりな話題転換で口に含んだ御飯を拭きそうになつて必死に口を押さえて我慢している。

俺は心ばかりの気遣いにリンの前にスッつとお茶を差し出した。そして希理子の口では無く、目を見る。

多少驚いた様子は見られるが、不機嫌さは見られない。

そして帰つて来た発言に一瞬耳を疑つた。

「えーと……、触つて、みますか……？」

咄嗟に頭を過つたのは翼が六つ生えた変態の姿だった。

事実は小説より奇なり。

というのも、あの女が現れてからは的を得た慣用句だと想えるゆつになつた。

当然、純粹な好奇心が俺の手を動かしたのは言つまでも無い。

「それでは、据え膳食わぬはなんとやらと言つて、遠慮なく。」

いつでも來い、と堅く口を閉じる希理子。

俺は、手を伸ばした。

と同時に、音を聞いた。

その音は鈍く、至極詳細に述べるのならば木製の箸が味噌汁のお椀を貫く音だつた。

物理法則を疑いたくなる様な所業を成し遂げたのは我が義妹で有る処のリンだつた。

「お兄ちゃん　　冗談で聴いたんだよね？　そうだよね？」

なるほど、口は笑つているが口は笑つて居ないという表現は、いつ時に使えば良いのか。

天国と地獄、いや意味合いを考えるなら両方とも地獄か。

ただその口を向けられて手を止めてしまつ程には迫力のある口つきだつたと言える。

「ああ、冗談のつもりだつたんだが、許可が下りたから折角なので思つてつい。」

何故だらう、血ひりの口から出でてゐる言葉が言い訳がましく聞こえる。

そんなはずはない、俺が言い訳……？

馬鹿な！

それはさうと、味噌汁のお椀の中心で箸が立つてゐる。

御飯でなら見かけない事も無い光景だが、味噌汁で見るのは初めてかもしれない。

いや、初めてだ。

お椀の下から味噌汁が零れる形跡はない。

「よし、リン、まずは落着いて両手を上げろ。今ならまだ間に合う。お前が刺してしまったその人もまだ今なら救い様がある。」

現実には既に手遅れ感が否めないが。

「うう……ううう……お兄ちゃんのえっちいいいいいいいいい！」

言葉と同時に引き抜かれた傷口からは止めどなく被害者の体液が溢れ出る。

俺は知っている。

何せ昨晩経験したし文献としても記述されている所を見た事があるからだ。

傷口に刺さった物は、けつして抜いてはいけないのだと言う事を。俺は希理子が持ってきた台拭きで机に広がってしまった味噌汁溜まりを拭き終わる。

ああは言ったか、お椀の中にはもう殆ど汁は残つていなかつたらしく、大惨事とまではいかなかつたが、事後のリンの機嫌の悪化まで含めるならば中惨事といった所であろうか。

「ふふ、リンちゃんは本当に契さんの事が好きなんですね。」

そう言つて希理子はほほ笑む。

ううむ、俺を保護者として慕つてている事と、俺が他人様の胸に手を伸ばす事は相反する事なのだろうか。

いまいち関連性が分からない。

だが事実としてリンがブイとへそを曲げているこの現状を見るからに原因は俺にあるのだろう。

「すまん、リン、悪かった、もうしない。」

「…………。」

ひとまずは謝るが、如何せん俺は無感情だ。

棒読みで反省の色など感じられるはずもなくリンはへそを曲げたままである。

「わかった、こうしよつ。次俺が同じ事をしたら、お椀ではなく俺の手を刺して良い。」

そういう問題なのかどうかはわからないが、俺が出来る最大限の譲歩だった。

「はあ……。」

すると呆れた様に温度の低い息を吐き出すリン。リアクションが帰つて来ただけ進展はあるようだ。

俺の選択はどうやら間違つていなかつたらしい。

「その選択はないけど、お兄ちゃんに言つても無駄な事だよね、それよりもお椀ダメにしちやつて『めんなさい渚さん。そしてお兄ちゃんが変な事言つてごめんなさい。』

「あらあら、良いんですよ。」

ふむ、蚊帳の外だ。

これは許して貰えたのだろうか。

「いや、リンは出会つた時よりも随分と色々な感情を表に出す様になつた。

これは色々と慣れて来ていると言つ事なのだろうか。

それはきっと良い事なのだろう。

「うむ、丸く収まつた様で何よりだ。」

「じー……。」

視線とは感情が籠つて居ないに關わらず殺傷性を持たせる事が出来るのだな、と俺は新鮮な発見に一人納得するのだった。

「さてこれからは事なのだが。」

リンはお腹が一杯になつて満足したからか、それとも半徹の疲れが出たのか、あるいはその両方か、縁側で猫の様に丸くなつて寝ている。

「そう言えばまだ何も事情を窺つていませんでしたね。聴いて良い事でしたら教えて頂けますと私としてもありがたいのですが。」

「そうだな、手短に話すなら、俺はリンを拾つた。リンは追われていた。家から出た所で追手に見つかった。直接やりあつたら肩を刺された。俺はリンを連れて逃げた。その後気を失つた。そこから先は希理子が知る所だ。」

俺は事実のみを話す。

嘘は付いていない。

真実を話しているとも言い難いが。

だがその限られた情報から希理子は考え、自らの意見を述べる。

「という事は、お家に戻るのは危ないのでないですか？」

頭の回転が速くて居てくれる事は非常に助かる。

何より余計な事を根ほり葉ほり聞きだされない事もだ。

「ああ、その通りだな。間違いなくあいつらは家の前を見張つてる。」

「うん、でしたら家にお泊りになられてはいかがでしょー。」

この場合希理子が家と言つたのは、このお屋敷という事だらう。確かにこの広さだ、部屋は有り余つてている事だらう。

が、それにも色々とリスクを伴う。

「有りがたい提案ではあるが、他人を巻き込むわけにはいかないという考え方もある。まあ既に若干巻き込んでしまつてている節はあるが、今ならまだ、俺達は他人から、赤の他人に

「お断り致します。」

戻れる、という言葉を遮つて出てきたのは希理子から初めて聴いた、明確な拒絶。

彼女の顔を見ればさも当然といった笑顔を浮かべている。

「一度出会つてしまつた以上、私たちは知り合いで。私には、神様がくれた出会いを無碍にする事はしたくありませんし、自分に嘘も付けません。何より私には見捨てるなんてそんな発想はできっこないんです。」

その最後の言葉には、今までの言葉には無い重みがあった。

それが何であるかは俺にはわからないが、きっと彼女が今まで生きて来て経験した中にその答えがあるのだろう。

予測した所でわかるはずもない、むしろ予測するなどそれは俺の傲慢でしかない。

「 どうか、ならば是非も無い 」 と言いたい所だが、それでは結局の所、根本的な解決にはならん。」

俺はそう言つて思う事を切り出す。

「 結局の所、奴らがリンを追い続けるからと言つて俺達がここで死ぬまで匿われ続けるわけにもいかない。それはわかるな？」

私は別に構わないのですが、とボソッと聞えた様な気もするが、本心ではそれがどういう事かを理解しているはずだ。

人の一生を左右する権利はその本人にしか存在しない。

「 それに匿われ続けたとしてもいつかはバレる。時間の問題だ。あいつらが黙つて家の前だけにへばりついているわけはない。戻つて来ないと考えれば当然捜索の手を広げるはずだ。」

「 である以上、結論は一つだ。」

「 ま、まさか、戦うおつもりですか？」

「 それ以外無いと言つならそつするまでだ。」

結論は簡単。

追手を潰してしまえば問題はない。

流石に追手をたつた一人のガキに一掃されたとなればある程度の時間は相手側も手を出しては来ないだろう。

ただそれが出来るかの話なのだが。

普通なら無理だろうと思つ。

だが、俺は幸運な事に いや残念といつべきだらうか、普通ではない。

「 そこで希理子、お前が協力してくれると言つのなら是非頼みたい事がある 」

その日の夕方、ホームセンターで頼まれた物を買い終え、とある専門店に来ていた希理子は買い物のメモの残りの項目に目をやる。

「いつたい何に使うおつもりなんでしょうか……」

「……」

品目を見る限り健全な日曜大工に使うというわけではなさそうだ。

だがそんな事は関係ない。

一度得たものを失わないため、そのためならば自分は何でもする。

そう何でもだ。

それは希理子が、あの時から、定めた自らの生き方であり、全てだ。

失うのはもう十分だ。

私は、私が得た物を、自分の出来る限りの力で守り抜く。

そう、誓つたのだから。

注文の品を一通り聞いた店の主人は訝しげな瞳で希理子を見た。

「……これ、何に使うんだい？」

私は予め彼から伝えられていたセリフを一点の曇りも無い笑顔で返した。

「学校の授業の実験ですっ。」

その頃俺は希理子に案内して貰い入った歴史を感じさせる古造りの蔵の中で、埃を被つた蔵書の数々に目を向けていた。

こういった中には必ずと言って存在する、実用的な蔵書を探すためだ。

蔵は全くと言って良いほど長い事開かれた形跡がなく、積もり積もった埃で蔵書のタイトルはいちいち見づらい。

使われている文字もかなり古い物で、読めない事は無いにしろその解読にも若干時間がかかる。

さらに言えば蔵書以外の、皿、壺、衣服、絵画、巻物等の骨董品の数々が邪魔をして中々検索が進まない。

そうか、時代を考えるのなら巻物の可能性もあるのか。

検索範囲が増えてしまった。

だが、焦る事は無い。

時間はたつふりとある。

それでも、無限ではない。

新学期まで一週間あるか無いか。

こんな事で入学式に出席できないなんて、折角入学の為に色々と用立ててくれた祖父母に申し訳が立たない。

そして何より。

俺自信の目的を達成するためにも、こんな些細な事で時間を浪費するわけにはいかない。

人生とは、時間が限られている物なのだから。

そんな事を考えつつ作業を進め、もう三つ皿になるであろう書架の棚の埃を払う。

どうやらタイトルを見る限り当たりのようだ。

「ふむ、より質の高い物で有るといいのだが。

俺はそう呟いて、蔵書を読み漁るのだった。

第一幕 第六章 『開戦』（前書き）

以下略

## 第一幕 第六章 『開戦』

契が希理子に助けられた日から数えて一日後。三日月の朧気な光が薄らとした雲間から蒼光を零す中、街灯に照られた一軒の家を見張る一台の車が車道脇に止められていた。中に坐して待つのは三人。

運転席で不機嫌そうに煙草に火をつけるジニー。

助手席で腕を組み、目を瞑つて沈黙を貫いているトロイ。

そして不機嫌さを隠す様子も無く頻繁に舌打ちを鳴らし、バックシートで足を投げ出して横になっているアンジェだ。

ここで張り込み始めて一日、ターゲットは依然として姿を現していない。

ただでさえ前回の失敗で同僚から散々な皮肉を言われている。

皮肉をのたまう同僚を片つ端から殴り倒そうとしてジニーに止められ、結局ジニーを殴り倒してその場の怒りを鎮めたのだが、その後に自分を拾つた直属の上司であり恩人である彼女にも言われたのでは怒りの矛先を他にぶつける訳にもいかなかつた。

お陰で今朝までアンジェの手は包帯でぐるぐる巻きになつていた。哀れ、自己に怒りをぶつけるために犠牲となつたアンジェの部屋の冷蔵庫は今頃粗大ゴミとしてゴミ処理場に打ち捨てられている頃だらう。

アンジェの頭の中ではその時彼女に言われたセリフがぐるぐると渦巻いている。

それは普通なら不安を煽る物であるはずなのだが、アンジェの中ではそれは怒りに転換され渦巻く。

次は無いと思え。

「クソッ……。」

常に脳内を占有する怒りの矛先を車の防弾ガラスに定めて何度も蹴りつける。

「ガキを虐められないからって車を虐めるんじゃねえよ」アンジエ。

「一応俺の車だぞ。」

「つせーんだよタ「ハゲ。そのための防弾ガラスだろうが。

これについては敢えて言つまでもないだろ。」

「にしてもあの糞ガキとロリコンナイトはまだ出てこねーのかよー。」

クソッ！このまんまじゃアタシのケツがシートとくつついちゃう。」

「つはつは、そりゃ高く売れるだろ。見た日に騙されて買った奴には同情するが。」

「クソッ……おいたロイー田瞑つてケツに根張つてゐくらこなら外回つて探してこいよ！」

「おじおい、それが今まで半田ぶつづけで見張りしてた奴にかける言葉か？」

「つちの御姫様はマリーアントワネットなんて比べ物にならないく  
れえ傲慢だからな。」

そう言つて笑つたジニーは視線の先に人影を見据えて居住いを正す。  
そして先程までの軽口を叩いてたものとは違つ、仕事の空気を纏つた声で呴ぐ。

「そんな必要も無くなつたようだがな。」

それに対する返事はない。

ただアンジエは体を起こし、トロイは田を見開く。

車内の空気が張り詰める。

そしてアンジエは本来の重苦しい口調で開始の合図を告げた。

兎狩りの始まりだ。

「やつと気付いたか……本気で捕まる気があるのやつ。」

それはたつた今、車からぞろぞろと姿を現した三人の表情を見れば  
問うまでもない事だろう。

たつぱり一日間焦らされただけあつて視線が随分と殺氣立つてゐる。

「怖い怖い。」

俺は無表情に心にもない事を呟く。  
メンツを見た限りはこの前と同じ。

禿頭の大男。

中肉中背の男。

そして相変わらずのハイエナ女。

あの内一人は一度は俺の即席トラップに掛かつたまぬけだ。

ブービートラップ。

簡単に直訳すればまぬけのかかる罠といった所だが、その効果は局地防衛戦、逃亡戦に置いてまぬけとは言い難い脅威性を有する。  
相手の心理の隙をついたトラップは敵に常に警戒心を解く暇を与えない。

実際に短い戦闘で有つても、その心理的負担は体感的戦闘時間を長期化させる。

精神的疲労は肉体的疲労に連動し、敵の体力を奪うものだ。  
さて、要するに一度トラップに掛かつた人間はトラップに對して普通以上に警戒を抱く。

これはトラップに相手が掛かる可能性を著しく下げる、と思われる  
がその実、敵の心理把握を容易にし、行動パターンを制限し、その  
パターンに従つてトラップを仕掛ける事も出来るし、何よりトラッ  
プがあるとわかつて進む相手はより精神的に消耗する事になる。  
以上の事から、前回とメンバーを変更してきた場合、多少とはい  
計算に誤差が生じる事にも為りかねなかつたと考えればこれは幸運  
と言つべきだらうか。

唯一の不運、というには必然性に過ぎた事項ではあるが、あの女が  
やはり再度姿を見せたと言う事だらうか。  
一度ため息をつく。

ちなみにリンや希理子には待機を命じてある。  
わざわざ釣り針に餌を一つ付けてやるほどサービス精神旺盛ではない。

それに万一の場合、自分の命を保障する保険にもなる。

奴らの目的は言つまでもなくリンなのだから。

今俺が位置するのは自宅の門前。

彼らまでの距離はおよそ五十メートル程だろうか。

これから俺は茶番を演じなければならない。

それは偶然敵に見つかってしまったか弱い兎キャラストという配役。

だがそれが茶番である由は獅子の配役を有した彼らが最も理解してくれているだろう。

そうなる程度には痛い目にあつてもらつたつもりだ。

兎と獅子の仮面を纏つた俺達は追跡劇チエイスレスという名の演目を演じる。

その仮面の下に鬼の素顔を有しているのがどちらなのかを、理解せぬままに。

一時の沈黙による空隙。

この静寂を先に壊したのは契だった。

アンジエ達と視線を合わせても終始同様した様子を見せず、無表情を貫いた揚句、背中を見せて一目散に逃げ出したのだ。

「やはり前回同様、一対多での直接戦闘は避けるか。」

咳きと同時にビリーが走り出す。

アンジエとトロイもそれに続いた。

逃げぶりにしても前回同様、フュイントと地の理を生かしたコース取りに契と彼らとの距離は離れるかに思えたが、その距離は中々開かない。

常に一定の距離が保たれた状態だ。

契はチラリと後ろを除き見る。

どうやら一日間遊んでいたわけではなさそうだ。

彼らもここら一体の地理を大分理解しているようで、コース取りによる有利が無くなっている。

もしリンを連れていたら瞬く間に追いつかれていただろ？  
まあ逃げきる気など端から無いのだが。

樹木の用に枝分かれする小道を不規則に折れ曲がるコースを取つて  
いた契が、気付けば不自然なまでの直線コースを走り続ける。  
揺れる背中を見つめ続け、その光景に若干アンジエ達が慣れた瞬間、  
彼の姿がふつと消えた。

それは彼らの慣れによる視覚の緩みを絶妙に捉えたコース転換。  
実際には小道を直角に折れ曲がつただけなのだが、その効果は大き  
く彼らは若干の焦りを感じる。

「つとに、ただもんじやないな。」

呆れる様に呟いたトロイ。

だがそれは紛れもない心の隙だった。  
彼は忘れていたのだ。

戦場では心に隙が出来た者から死んで行くのだと言う事を。  
曲がり角を曲がつて急に体を止めたアンジエとビリー。

だが気の緩みからそれに対応できず一步足を踏み出したトロイの足  
先、僅か十センチメートル程の距離から所々に鉄片が転がつている。  
三角錐の中心から各頂点へと鉄刺が伸びるような形のそれは文献で  
しか見たことのない撒菱そのものだった。

あと一步先に踏み出していたらその鋭い先端が足に突き刺さり、ダメージとしては大した物ではないにしろ追跡を続ける事は困難にな  
つていただろう。

「おいおい……忍者かよあのガキは。」

本来は敵の足止めに使用されるそれは道路の一帯にバラ撒かれてい  
るが、散布した本人は逃げきる事をせず、相変わらずの五十メート  
ル程先の距離からその様子を無表情に眺めている。

余談だが、撒菱は一般的に忍者が使うというイメージが強いが、実際は西洋での戦争時、騎馬や兵の進行を遅らせ、又その突進力を弱めるために使われたのが最初だという。

余談終わり。

アンジェはその先に立つ契の口端が微かに釣り上がるのを見る。頭に血が上つて来るのを感じるが、投擲ナイフもこの距離では恐らく効果を成さない。

今は追うしかない。

再び背中を向けて走り出した契を、追いかけながらアンジェは血が上つた頭を向かい風で冷やしながら考えていた。

誘導されている。

これは確信だつた。

走る姿を見ても全力で逃げきる気が無いのは明白だし、何より本来追跡を阻害する目的

を持つた撒菱を攻撃、または挑発だらうか、そんな目的のために使用してきた所を見ても間違いない。

きつとビリーもトロイも同じ事を考えている事だらう。

だがそれでも追うのを止めないのは、それ以外に自分達に選択肢がないからであり、追跡に於いて自分達は後手に回らざるを得ない。

そしてこの認識はこの先一瞬たりとも気を抜く事が出来ない事を意味する。

そして予想通りというべきだらうか。

彼が逃げ込んだ先は街灯の光もほぼ届かない、有刺鉄線に縁取られたフェンスに囲まれる荒廃した建物。

恐らくは工場の跡地だらうか。

フェンスに予め大きく開けられた穴を抜け、その先の草むらを抜けた闇の中に彼の背中が消えて行くのを目にする。

そこで一度足を止める。

「こりやあ……。」

「ああ、間違いない、誘い出されたな。」

トロイの弦きにビリーが確信を持つて答える。

「ちつ、気にいらねえ、終始あいつの手のひらの上で踊らされてる。

」  
そう、現状それは誰が見ても偽りの無い事実だ。

「だがな、罠があると分かつて掛かる程俺達だつてまぬけじゃない。それにあいつの目的は恐らく逃げる事じやない、俺達を潰す事だ。である以上、あいつは俺達を常に捉えた位置にいるはずだ。それはこちらにも攻撃のチャンスがあるという事実に他ならない。なにより俺達は三人いる。手はいくらでも打ちようがあるさ。」

そう言って一息ついたビリーはいつも通りのトロイを前衛に据えた陣型を意識し動いた。

言葉もないその動きに答えアンジーとトロイも体に染みついたその陣型へ移行する。

「いぐぞ。」

「「「ウイルクッ！」」

「うひじて、ここをお互いの墓場とするべく戦いが幕をあけた。」

第一幕 第七章 『終幕』（前編）

ハイクション云々以下略

「んむう……お兄ちゃん遅いね……？」

「そうですねー、コンビニに行くだけにしては時間がかかっていらっしゃるようですね。」

目を擦りながら眠気と戦うリンを傍田は、希理子はまったくワザとらしく見えない笑顔を浮かべる。

リンは彼が、今頃戦っているであろう事を知らない。

リンにそれを言えばきっと彼に付いて行こうとするだらう、という彼の思案の結果だ。

だがリンなりに何か違和感を感じているのだろう。

昨日なら既に熟睡していた時間帯で有るにも関わらずリンは睡魔に抗い続けている。

「リンちゃん、大分眠そうですが大丈夫ですか？」

「うーん……眠い……けど、もうちょっと……待ってる……ふわあああ……。」

大きく欠伸をかけて目尻に涙を浮かべるリンの頭を希理子は優しく撫でた。

「……早く帰つて来るといいですね。」

紡いだ言葉はリンに向けられて放たれたにしてはそれに相応する大きさを伴つて居なかつた。

つまる所それは自らに向けられた言葉であり、そこには希理子が抱くはずのない（・・・・・）不安という感情が確かに含まれている事には、希理子自信気付く事は出来なかつた。

そこにあるはずの無い物というのは、案外見つけられない物なのだ。

そしてその事を違つた形で実感している三人が居る事など、彼女には知るよしも無かつた。

「おーおー……、冗談だろ?……?」

そう呟いたのは陣型における先行偵察を担うトロイだ。

その発言は眼前にぽつかりと空いた草むらで巧妙に隠された穴の中でカラカラと音を立てて回る一本の円柱形のローラーの様な物を指している。

ただのローラーではない、その表面からは鋭く削られた木片が所々突き出している。

「ベトナム戦争で使われたブービートラップの一種だな。引っ掛けついたら足がボロ雑巾みたいになつてた所だ、比喩とかじやなくな。」

そう呟くジニーの顔は笑つていてる様だが、微妙に引き攣つていて。穴の端を踏んだ事で穴を塞いでいた枝が折れ、上に被さった木の葉や土砂が崩れたのは幸運だったと言つ他無いだろ。

トロイも気を抜いたつもりは無かつたが、穴の隠蔽の仕方が素人のそれとは思えない物だったために視覚ではとても判別できなかつたのだ。

「少なくとも法律を守るとかそんなチャチな心構えじゃ無いってことか。」

ちなみにこいつた殺傷を目的としたブービートラップを仕掛けた事はまじり事無き犯罪行為だ。

この前の学校でのトラップは電気を利用した物が主であり、その目的は殺傷というより対象の無力化に重点が置かれていたが、今回はどうやら殺傷を目的としている節がある。

「……刺の尖端が若干湿つてやがる。何か塗つてあるみてーだな。

「うむ、殺しに掛かってきたと見て良いかもしれんな。」

アンジェが独白し、ジニーは息を飲みつつ呟く。

「ストップだ。」

再び進み始めて十秒もしない内にトロイが声を発する。

同時に歩みを止める残り一人に説明もせずに手ぶりで後ろに下がる様指示を出す。

二人が下がったのを確認し、トロイは少し後ろに下がると同時に、転がっていた小枝をその先の草むらに投げる。

宙を舞う小枝が、低い位置に張られた釣り糸に触れた瞬間、僅かな振動を敏感に感じ取り仕掛けが作動する。

草むらと木陰に隠された位置、一端は地面に刺さりもう一端が撓つたまま地面すれすれに固定された半分に割られた竹。

それが糸の僅かな振動で解き放たれ、一端が風切り音と同時に飛来し空を切つた。

仕掛けが張られていた地点、丁度大人の背丈での胸部の辺りを通過する。

作動後、地面から生え揺れるその先端を見れば、例の如く鋭く尖つた竹の棘がブランシの様に何本も突き出している。

「次はスパイクボールもどきか。これも何か塗られている様だな。」

「もはや驚きはしない、ただ今まで以上に警戒を強めるだけだ。

じりじりと、だが着実に前へ進んでいく。

それほど距離が無かつたはずの草むらを十分程掛けて抜ける。

結局落とし穴とワイヤートラップの二つ以外にトラップは仕掛けられていなかつたのだが、精神的にはやはり三人とも必要以上に疲弊していた。

草むらを抜けた先には廃工場であるはずの大型の建物に電気が灯つていた。

「まだ電力系統が死んでいないみたいだな。」

「掛かつてこいつて所か。」

「上等じゃねえか……所詮ガキの浅知恵だ。」

戸口は既に開かれていた。

トラップを仕掛けるのに戸口程効率のいい場所は無いのだが、それが既に開けられていると言うのは此方を歓迎するという証なのかな、それとも更に何かトラップを重ねているのか。

どちらにしろ常に警戒が解かれる事はなく、慎重にその歩みを進める。

中に入るとそこにはただ広い空間が広がっていた。

機材等は既に運び出されているのだろう。

奥に伸びる長方形の空間、両サイドの階段から一階通路に上がる造りになっているが、階段や通路自体も所々が崩れ落ちているため人が通るには少々困難な状態となっている。

広いスペースには不自然に大きな水たまりが広がっておりそのスペースの八割程度が浸食されている。

あとは残り一割ずつ程の細いスペースをその両端に残しているのみだ。

「分かりやすいトラップしかけやがって、おちょくってんのか……。」

「そう呟いたアンジエの視界には水溜りを越えた向こう側、壁から伸びる途中で断裂した太い銅線が水溜りに浸かっているのが映っている。

「水溜りにつつこんだらバリバリーってか。水が白く濁つてやがる、ご丁寧に混せ物までしてあるぜ。」

水には電気抵抗を減らす為に何かを溶かしてあるようだつた。

「くだらねーな。」

そう言つて水溜りの無い空間の端に足を向けたトロイはその細い道を見て足を止めた。

「おいおいおい……こりや悪い冗談だろ……。」

そもそもそのはずだ、そんな物騒な物が現代の日本という国に存在していいはずがなかつた。

道全てを覆う様に張り巡らされたワイヤー。

そのワイヤーを辿つてみればそれは扇状の飯盒の様な形をしたブ

リキ缶に繋がっていた。

そのブリキ缶から更にワイヤーが伸び、高い壁伝いに三つ程の同じ様な扇状のブリキ缶に繋がっている。

それが、本物ならその射程距離は恐らく水溜りより一ひら側の空間を全て覆う程度の物になるだろう。

「旧式のクレイモヤ地雷か……？」

「仕掛け方はお粗末だが、恐らくそうだな。一体どうやって手に入れたんだか……。」

クレイモヤ地雷とは、簡単に言えば指向性散弾地雷だ。

有効射角約六十度、有効射程約五〇メートル、最大射程は約一五〇メートル。

一発一発が強力な空気銃程度の威力を持つ数百個の鉄球を。このタイプはワイヤーが引かれる事で信管が炸薬を起爆させる物だ。

しかも一つが起爆すればその衝撃で同時に四つが作動するよう改造成してある。

これまでの物とは違い、この仕掛け方は確実に殺害することを目的としている事が窺える。

「解除するから三分待つてくれ。ただ万一一のために外でな。」

本来トロイは戦闘関係よりこう言つた工作作業を得意とした要員である。

そのトロイが解除できると言つのであれば間違ひ無いだろう。

「「「ウイルク。」」

静かにアンジェはジニーと共に元来た入口を出た。

お互に声を掛ける事も無く、そのまま凡そ一分間が過ぎた時、中から現状最も聞きたくない音が聞こえた。

バシュツつという音に続く複数の連續する火薬の破裂音だ。

同時に先程まで付いていた工場内の電気が一つ残らず消えた。アンジェは全身から嫌な汗が噴き出るのを感じた。ペンライトを付けお互いの姿を確認する。

ジニーと田を合わせ、言葉も無く扉を開き、細い小道ではなく水溜りの中に倒れ痙攣を起こしているトロイを田にする。

先を照らしてみると小道に何かが落ちているのが分かる。

そして先程の音を思い出し、落ちているそれをもう一度見て理解する。

ひとまずトロイを水から引き上げる。

グローブは絶縁性の物を使って居るので感電の心配はない。

その際にトラップワイヤーに引っ掛かるが当然そんな事は気にならない。

クレイモヤトラップは『ダミー』だったのだ。

ブリキ缶の立脚に結び付けられた細い釣り糸が薄く積もった土の中から飛び出している。

そしてその細い糸は巧妙に隠されて天上、つまり一階の床下まで伸び、その真下には爆発したと思われる何かと、着火した爆竹の残骸が煙を上げていた。

シナリオは恐らくこう。

ダミートラップを解除しようとしたトロイはトラップ解除をしようとした人間を目的とした一重のトラップを起動させてしまった。そして恐らくあの残骸、先ほど聞いた最初の音からするにフラッシュユグレネード。

それもこの間使われた物よりもサイズも大きい。

ただでさえ命を掛けたトラップの解除には桁外れの集中力を要する。

トロイは恐らくその解除トラップを発動させた事で己の死すら予見した事だろう。

そして待っていたのはフラッシュユグレネードにより視界を遮られた状態で連續する銃声に似た破裂音。

最大限の緊張状態でそんな事が起きれば誰でも錯乱状態に陥つてもおかしくはない。

そしてすぐ隣にある水溜りに足を踏み込み今に至るという所だろ

う。

「……人間の心理的な動きを上手く予測してる。」

重苦しく呟いたジニーは気を失っているトロイを見る。

早めに引き上げたお陰か息はしているようだが、当分は目覚める事も無いだろう。

そんな時、不意に声が聞こえる。

「ふむ、美女と野獣で残り一人か。この間よりはやはり警戒してみたいだな。」

声のする方をライトで照らすと水溜りの向こう側で唯一の扉から体を出して此方を見る契の姿があった。

「やあ、どうだね、たつた一人のガキの手の平の上で踊られる気分は。」

「……こんのつ、糞ペド野郎！今すぐ掛かって来い！ハラワタ引き摺り出して蝶々結びにしてからあのチビ餓鬼の頭押し込んでやる！」

激昂するアンジェの瞳を冷ややかに見据える契は、もう一人、ジニーの方へも視線を送るが、帰つて来たのは沈黙のみだった。

「ふむ、まあそう焦らずともこの先で待つていろ。気が向いたら来ると良い。」

そう言つて契はその鉄の扉の向うに幽鬼の如く消えて行つた。

「アンジェ、敵に感情を見せるのはお前の悪い癖だ。下に見られるぜ。」

「やつてる最中に下に見られたつてかまやしねーよ、相手が逝く瞬間は何時だつてアタシが上さ。」

立ち上がりながら言うジニーに、ペンライトを持っていない左手で腰から逆手にアーミーナイフを抜きつつアンジェが答える。

それに対してもジニーは渋い顔で返す。

「見つけてもまだ殺すなよ。あのガキにはチビガキの居場所を吐いて貰わなきゃいけないんだからな。」

「脳味噌と舌さえ無事なら喋れるさ。それ以上アタシは保障出来ないね。」

だめたこりやと軽く芝居がかつた様子で首を捻つたジニーは、電力系統が落ちているとは思われたが一応水溜りを避けて小道を進む。後に続くアンジェの瞳はこれ以上ない程にぎらついている。

契が消えて行つた鉄扉の前に辿り着く。

ペンライトで扉を照らすと一枚の張り紙が貼つてある事に気づく。内容は、ここから先に進むなら命の保証は出来ないといった物だ。アンジェが勢い余つて貼り紙を破りそうになるが無言のままジニーがその手を掴み止める。

そしてペンライトの光を貼り紙の右下隅まで持つて行くと細く光を反射する物が見える。

それは細い糸で大きく周り道を描いて真上まで続いている。

ライトで上を照らすと何か液体の入つたガラスの瓶が釣るされているのが見える。

「つたく、お前の行動パターンをお前自身よりも理解してそうだぜあのガキは。」

「けつ……。」

言葉を交わしながらお互い一步下がり、アンジェが敢えてナイフでその糸を切断すると液体入りのガラス瓶が扉の前で破碎音と共にその中身をぶちまけた。

当然、貼り紙を破り捨てようとしたものなら液体を頭から被る事になつていただろう。

明らかに化学変化が起きている風な音を立てながら白い煙を立てている所を見る限り頭から被つて幸せに慣れるような類の薬品ではない。

貼り紙の内容もあながち嘘といつ訳ではなさそうだった。

さて、と独白しアンジェに手振りで扉から離れる様に指示するジニー。

しぶしぶという様子でアンジェがナイフを仕舞いながら退くのを確認後、扉を開けると同時に自らも扉を盾にする様に脇にそれる。

すると当然の如く風を切る音と同時にしなった竹の先端に付いたスパイクボールが扉の向う側から飛び出した。

アンジェなら顔面か頭部、ジニーならば胸元から喉にかけてがある場所辺りを通過する。

反動で揺れ続けるその刺の塊を見て肩をすくめるジニーと、視線を微動だにしないアンジェはお互いに目を合わせ、また視線を扉の奥に戻した。

そこでまた目を丸くする事になる。

扉の向こうには姿見が設置してあった。

一見無駄な配置に見えるが、もしそのまま扉を開いていた場合、電力系統が落ちていて今ペンライトの光が反射され一時的に視界を塞がれていたはず。

そうでなくとも目前に現れた自分自身の像を反射的に確認してしまっていた事だろう。

その一瞬を必要とする動作には反射的な回避運動を阻害する効果がある。

「つたく手の込んだ真似しやがって……」

そろそろお決まりパターンとなりつつあるトラップに辟易しつつジニーを先頭に扉を跨いだ。

その瞬間だつた。

一瞬の擦過音と風切り音。

と同時に鋭い何かが肉に突き刺さる音がした。

アンジェの視界はジニーの体で塞がれており前方で何が起きたのかはわからない。

「おいジニー、何が

ジニーの肩に手を置いて気付いた。

彼の体には力が全く入っていない。

そのまま倒れ伏すジニーの胸には細い鉄パイプを加工した矢が突

き刺さっていた。

ライトを照らすと鏡の下部に小さな穴があいている。

先程見た時はそんな穴空いていなかつたはずだ。

だが改めて下を見ると穴を丁度塞ぐサイズのアルミニ箔が落ちている。

本当に殺す気で来ている。

あの命の保証はしないという表示は虚勢や出まかせの類では無かつた。

そして気になるのは矢を放ったトラップの起動要因。

今まではワイヤートラップがメインに使われていたがこちら側を見る限り鏡の裏から糸が伸びていて続いている様には見えない。

部屋全体を軽く照らしどうやらここは工場の事務室だと判断する。埃が薄らと積もつた書類用ロッカーやホワイトボード、業務用デスクや中央には大きな机が位置している。

静まり返った室内に人が居る気配は無い。

だが間違いなく今先程まで奴が居たはずだ。矢は手動で発射されたと考えるのが自然。

恐らくは一回目の扉を開く音を合図に。

トラップだけに警戒していると足元を掬われる。

普通に考えるのならば心が折れて引き返している所だろう。

ただでさえ致死性を持つブービートラップが人に与える精神的負担は並はずれた物ではない。

この時世に死と隣り合わせの時間を経た事のある人間がどれほど居るだろうか。

アンジェでも修羅場を潜った回数など数えるほどだ。

それですら命を危険に晒す程の物では無かつた。

だが、それでもアンジェの頭の中に引き返すと言つ選択肢が現れる事は無い。

それは幸か不幸か、彼女が契約により無くした感情、そして残した感情による副産物で有ると言える。

彼女が身体能力を得るために支払った代償は、怒り以外の感情。故に彼女は迷わない。

彼女を突き動かすのはただ純然たる怒りのみなのだ。  
そして怒りという感情はこの時ばかりは彼女から冷静さを奪う事はなかつた。

むしろ怒りにより血が上つた状態が続いた事を要因とする怒りと  
いう感情に対しての慣れ。

それが今彼女に冷静さを与えている。

入口でこれ以上のトラップが発動する事は無い。  
それなら入口からまずクリアリングを済ませる。

視界が届く場所という場所全てにライトを当て安全を確認して行く。

すると当然の事ながら見つかった。

これまた信じがたい物が瓶に詰められた状態で天上付近の換気扇にセットされていた。

「Mk-2手榴弾……バイナッブルか。アントルメかフルユイつて意味じゃ確かに洒落が聞いてやがる。」

アントレかロティーが先程のダミークレイモヤつて所だとするならジニーはサラダで食中りつて所か。

アントルメ、フルユイ、アントレ、ロティー、サラダ、いづれも西洋フルコースメニューの呼び方だ。

若干下らない事を考えつつ、随分と凝つたサラダを出す店だと冷めた視線でヘタの抜かれた瓶詰バイナッブルからじ丁寧に伸びるワイヤーを目で辿る。

手榴弾は基本的に安全ピンが抜かれレバーが外れてから数秒で炸薬に火が付き鉄破片を撒き散らす割とポピュラーな殺傷兵器だ。

加害範囲は半径一五メートル程だと言われている。

この部屋で言つなら中央で爆発されると逃げ場が物陰以外無くなる程度の範囲だ。

そんな物騒なデザートが部屋の隅に位置する換気扇に挟まつてい

ると言つのは余り気分のいい物ではない。

ちなみにワイヤーは壁伝いを通して少し先の床に張られていた。これも根元から追つて行かなければ気付けないような巧妙な隠し方をしている。

だが糞物騒だとと思う反面、アンジュの頭にはもう一つの可能性が浮かぶ。

先程のクレイモヤトラップに関してはダミーだった。

恐らくはただ外装を似せただけのブリキ缶だろう。

そうなると奴の使用したトラップには共通して、火薬が使用されて居ない。

簡単なフラッシュコグレネードは使用しているがそれは別格だ。あの手榴弾もダミーである可能性が無いとは言い切れない。先程と同じく、解除の際に連動して発動するトラップが仕掛けられている可能性もある。

まあ長く考えてしまつたがどちらのパターンにせよ、不用意に触らず起動トラップにも掛からなければ問題は無い。

そう思い、足元に気を付けつつ部屋を進んでいく。

部屋の中央まで進んだ所で大机の上に一枚のメッセージカードが置かれているのに気づく。

明らかに罠の香りがする。

だがその表には、男が書いたにしては几帳面な整つた文字で、  
「*or pursuer*」と書いてある。

紙の周りを見るが糸が付いている様子もない。

「回りくどい真似しやがつて……。」

そのメッセージカードを手に取つた瞬間、二つの事に気づいた。

一つはそのメッセージカードの裏面に書かれた文字。

『*This is the last trap. If it survives here, next, I will do  
    n ce with you.*』

日本人特有の丁寧過ぎる英語。

何のために英語にしたかなんてだいたい予想はつく。此方の判断を一時でも遅らせるためだ。

内容からもわかる。

それはこのメッセージカードがやはり罠である事を示している。そして気付いた二つ目、手に取つた際に明らかにメッセージカードの重さを越える重力と、同時にその重力からの解放を感じた。メッセージカードが置かれていた机には細くだが、錐か何かで穴が開けられており、メッセージカードの裏にはテープでワイヤーを張り付けていた後があつた。

同時に机の下からガラス瓶が落ちる音と重苦しい鉄の塊が転がる音が聞こえる。

微かに鉄同士がぶつかる様な音も聞こえたがそれは間違いなく安全レバーが外れる音だった。

体中から嫌な汗が噴き出す。

これがダミーであるはずがない。

奴が意味の無い仕掛けをしていた事は一度も無い。考える前に体が反応し机の端に飛び乗る。

机の隅に落下運動で多少増加された人一人分の重さが一気に掛かり、飛び乗つたのとは反対側の足が少し浮き上がる。

同時に机の両端を掴みそのまま勢いを利用してこちら側に強引に引き上げる。

かなりの大きさの机だが、強化されたアンジェの力で机は部屋の中央で立ち上がり盾の役割を果たす。

それから一秒も立たず机を抑え込んだアンジェの体に強い衝撃が走り、ゼロコンマゼロ数秒遅れて指を耳栓にして両耳を塞いでいて尚、耳を劈く様な爆発音が響き渡つた。

当然ながら爆発は一秒も立たずその猛威をふるい終える。

衝撃に備え閉じていた瞳を開くと対面に見える壁が綺麗に長方形を残して鉄片で抉られている。

立ち上がり部屋全体を眺めると上下左右至る所が見る影もなく破

壊されている。

換気扇にセツトされていったまつはやはりダミーだったようでレバーが外れた状態で粉々になつた瓶の破片と共に台所に転がっている。体を確認するが外傷はない。

若干耳鳴りが残つているがさほど氣にする程の物でもない。どうやら契が言つところの最後のトラップとやらを潜りぬけたらしい。

クレイモヤトラップは前菜、オードブルに過ぎなかつたといった所だろうか。

何故換気扇にダミーを使用したのか。

それだけが若干心残り、というよりは疑問だった。

両方とも本物を使って居れば同じ様に机を盾にしたとしてもその方向次第、五十パーセントの確率で鉄片によりミンチにされていたはずだ。

まあ過去の仮定などした所でどうにもならぬ。

今は自分が生き残つているという結果を居るかどうか怪しい神様とやらに祈るべきだらう。

あとは、扉の先に待つあのいけすかないロリコンをハツ裂きにしたら、おつと勿論それはチビ餓鬼の場所を吐かせてからに話だが、仕事は終わりだ。

下の階で寝ているトロイを引き摺つて、生きているかどうかは知らないが扉の外に引きずり出しておいたジニーも回収して、家に帰つて熱いシャワーを浴びればあとは寝るだけだ。

三度目は無い。

正面から遣り合えばあの糞に遅れを取る様な事は無い。有る筈がない。

この前は完全に甘く見ていた結果、相手の手中にハマつてしまつたが、近接戦闘に於いては自分に並ぶ者など少なくとも組織の中にも今まで出会つた人間の中にも居なかつた。

次は会話をして時間を稼がせるつもりもない。

姿を見せたら即取り押さえれば良い。

部屋に入つてからの流れを想定しつつ、アンジェは最後の扉を憂いなく開いた。

最後の最後にトラップが仕掛けた有る、等という無粋な真似はしなかつた様だ。

何の問題も無く開いた扉の向こう。

長細いロッカールームからロッカーを取り除いた様な構造の真つ直ぐ一本の部屋。

出口は今アンジェが入つて来た扉と、部屋の奥、パイプ椅子に坐して沈黙する彼の背後にあるたつた一つの窓だけだ。

大きく開かれた窓から流れ込む冷たい夜風が頬を撫でるのが激しい動きを終えて火照った体には気持ち良い。

「……生きていたか。」

「……。」

咳きつつ顔を上げた契にアンジェは無言でもつて返答する。

そして徐に一本、投擲用のナイフを投げる。

だがそのナイフは彼の頭上を掠めていくだけだった。

勿論外してしまった訳ではない。

敢えて外したのだ。

そしてそのアクションに対する契のリアクションを見て確信する。

彼は全くと言って良いほどその動作に反応しなかつたのだ。

出来なかつたのではない。

しなかつた。

この間の戦闘でこいつは私のナイフを確かに避けた。

今までに投げた相手に一度として（・・・・・）、一度としてだ、

避けられた事が無かつた。

それどころか反応を示せた人間すら皆無だったそのナイフを避けたのだ。

それも予め飛んでくる場所が分かつて いるかの ような 最小限の動作で。

「まさかとは思つたけど、アンタ人の思考が読めるのか？」

「だつたらどうする？」

その返答は実につまらなさそつた。

余りに感情の無い眩きにアンジェの神経を逆撫でする程だ。だが逆にソレをもつて確信する。

「アンタも、契約者だね。」

今までに出会つた事は無かつた。

だからと言つて自分だけが特別な存在だと思いこむ程アンジェは子供では無かつた。

必ず居るはずだと考えていた。

そう、自分と同じ、感情を代償に支払つて力を手に入れた人間が。「……お前もあの淫魔に誘惑されたのか。その年齢と体格の女にしては馬鹿力が過ぎる訳だ。」

予測が確信になる。

「言葉はもう必要ない。アンタが心を読むならそれでいい。ただアタシはアンタの思考が追いつかないレベルで、動けば良いだけだから。」

言葉と同時にアンジェの体がぶれた。

その寸前に見えたのは彼女の右手が腰の後ろに伸びる動作。

動作の開始点からトップスピードまでの加速時間を極端に短くる事で、視覚は物体を見失う、はずだった。

だが契は正確にアンジェの姿を捉えている。

その動きは人間の出来る限界を軽く超えていた。開始と同時に左に体をスライドさせ直後に跳躍、壁を足場としてさらにもう一段の跳躍。

その程度の動きでアンジェの体は天上付近まで上がつていた。

そして飛び上ると同時に体の重心を反転させ、天上に足を付け、その体に掛かる力のベクトルが上昇方向から下降方向へ転換する前に天上でもう一段跳躍する。

「忍者じゃあるまいし……。」

無感情に呴いた契は確かにアンジェの瞳を捉えた。

その光は明確に此方を捉えている。

この前はハイエナと評価した瞳だがそれは間違いだつたかもしない。

あれはハイエナなんてもんぢやない、ヒョウかピューマかソレ以上か。

獅子はやはrianアンジェの方だったのかも知れない。

そんな事を考えつつ、飛来する物体から回避動作を取るため、立ち上がると同時にパイプ椅子を端へ蹴り飛ばし、そのままバックステップでアンジェの落下予測地点から離れる。

契が跳躍すると同時に、天上を跳ねたアンジェの体が鋭く飛来する。

右手に握られた刃渡り三〇センチメートルはあろつかといふアーミナイフを体を捻り着地に備えながら構え、落下と同時に振り下ろす。

正確に肩の付け根を狙つたそのナイフが空を切る。  
だがそれはアンジェの踊る舞踏の序曲に過ぎなかった。

着地と同時に振り下ろされたナイフがその落下運動の制御に必用な力のベクトルを感じさせない様なバネの用な動きで急速に跳ね上がる。

きっと普通の人間がやれば今の動作だけで間接が外れて居てもおかしくは無い様な動作だ。

跳ね上がったナイフはバックステップした契の体を追いかけるが、ステップの着地に一瞬間に合わず、契が体を横に逸らした事で再度空白を突いた。

彼女の攻撃はまだ続く。

空に突き出されたナイフを伸びきった腕を全く使わず小手先の動きだけで逆手に持ちかえ、サイドに体をずらした契の体を更に追いかける、さらにその一撃を躱されると今度は伸びきった腕に引っ張られた体をそのまま一步のステップで加速させ、体を回転させると

同時に右で大振りの蹴りを放つ。

その足を左腕に右手を添えて受け止めると全力で鉄パイプの一撃を受けるような衝撃が左腕に響く。

激痛は神経系を通り脳に届くがその痛みの情報から左腕の骨がいつたであろう事だけを取り出して冷静に判断し、攻撃を受け止める事を諦める。

アンジェは大きく振り出した右足により増した回転運動に身を任せ、体を捻つて左足での後ろ回し蹴りを更に浴びせる。

契はそれが不可避で有る事を悟り、既に使い物にならないであろう左腕をクッショーンにその一撃を凌ぐと同時に次の一撃から回避するべく更に後ろへ距離を取つた。

左腕を盾にした際確実に骨折したと思える生々しい音が鳴り響く。一方まるでゲームの様な空中コンボを決め終えたアンジェは一度着地して姿勢を正す。

その姿には一点のブレもない。

息が乱れている様子すら皆無だ。

しかしその表情には先程よりも更に明確に浮立つた怒りが見てとれる。

全ての動きが常人なら目で追つのはら困難なはずなのだ。

捌ききれるはずがない。

思考を読む程度では不可能なはずなのだ。

それも自分と同じ様な年齢で、恐らくは数える程も実戦を潜りぬけた経験を持たないド素人がだ。

「何を隠してやがる……」

思わず呟いたアンジェを、左腕の激痛がまるで無い物かのような無表情で冷ややかに見る契は質問には答えず返事を返す。

「所詮お前はその程度という事だ。」

「ふ、ふふふ、あつははははつ、最高だよアンタ！！」

怒りとは突き詰めれば感情の高ぶりだ。

怒りと喜び、過程は違えどそれが限界に達した時、人はこのよう

になるのだろう。

狂氣染みた瞳で笑うそれを、外氣よりも幾分か冷めた瞳で見つめる契に、アンジェは言葉を続ける。

「左腕はぐしゃぐしゃで痛み以外の感覚なんて感じないだろうー。その上アタシは無傷！それどころか反撃一発繰り出す暇無いじゃないか！」

その言葉はまるで、自分自身に言い聞かせる様な独白染みた響きに満ちていた。

いや、むしろ契にはそう聞えていた。

「ふむ、現実から目を逸らすな、と言つても無駄なのだろうな、では先に言つておいてやろう。」

上着を脱ぎ捨てた契の胸元には赤い点滅を繰り返す卵程の大きさを持つ機械が張り付いていた。

「まず一つ、お前が俺を殺した場合、もしくはこの装置が俺から無理矢理に剥がされた場合、この建物が吹き飛ぶ。この心臓の装置が心音を感知しなくなると同時に倉庫の基礎を支える各柱に設置した爆薬が爆発する仕組みになつていて。そして一つ、お前らの目的で有る所のリンは知り合いに託してある。俺からの連絡が一日以上途絶えた場合、一年間は幽閉するように言い含めてある。三つ、俺はまだ本気を出していない。とまあ、以上がお前がその程度の物であると俺がお前に對して評価を下した理由だ。」

そう言つて一息付き、アンジェの返答を待たずに言葉を続ける。

「つまりお前は、俺を殺さず、氣を失わせ組織か何かに連れ帰つて拷問にでも掛けて無理矢理俺に口を割らせるか、精神的に敗北を認めさせるしか無いという事だ、果たして怒りにまかせたお前のその動きでソレを実現しうるのか、まあ当然否だ。むしろ敢えて言おう、それ以前にこれからお前は俺に一発も攻撃を当てる事も出来ずに負ける。」

そこまで言つてしゃがみ込んだ契は隅に転がつた鞄から一本の警棒を取り出す。

長さは三〇センチ程度と言つた所だろうか。

ソレを右手に持ち、右半身を正面に構え俯くアンジェを見据えた。そして気づく、アンジェの様子がおかしい事に。

先程まで溢れだしていた怒気が感じられない。

だがその分、異様に増している何かが肌をひり付かせる。

「 言いたい事はそれだけ……？私はもう死んでもいい……貴方を殺したいの……ただ、それだけ……。どうせ任務を失敗して組織に戻れば待つてるのは死だもの……、それなら私は私がしたい様にして死ぬわ。」

それは今までのアンジェでは無い、明らかに別の人格。

「 多重人格、という訳ではなさそうだな。敢えて予測するならそう、元人格といった所か。」

契約により感情に偏重をきたした人間は総じてそれまでの人格とは全く違う人格を有する様になる。

それは自分自身で何となく理解していた。

だがもし一つの感情の残滓を限界まで膨らませた場合にそのような現象が起ころるというのならばそれには驚きを示さざるを得ない。

一体どういう原理でそのような事が起きているのかはわからない。感情を器として定義するのならば、一つの器が溢れだす事で別の感情を誘起すると言うのは良く聞く話だ。

感情を誘起すると言うのは良く聞く話だ。

怒りが余つて泣きだしてしまつ。

怒りが余つて笑いだしてしまつ。

逆も又しかり、別も又しかりだ。

だがそれが感情をすっぽりと奪われた人間に適応される理論であるのかはわからない。

例えば奪われたのが感情の器自体であつた場合、溢れだした感情が貯まるのは一体どこなのか。

それは考え始めれば切りのない、それこそ宇宙創成について考える様なものだ。

だから俺は思考を中断し、ただ目の前の少女を見据えた。

「聞けるうちに聞いておくよ……貴方の名前は……？」

問われた契は一拍考えた後、その問いには答えを返す事にした。

「夜永 契。」

それは気まぐれでしかない。

彼にとつては名前などどうでもいい物だ。

では相対するこの少女にとつて名前とは何か特別な意味を持つ物なのだろうか。

「契、ふふ面白い名前。でもね、私には名前なんて無いの。だって私はアンジエだもの、それは名前じゃない。私を示す記号。悪魔の枝に実った一つの果実の名前に過ぎないの。花粉を運んでくれた虫さんは私が殺しちゃったしお花はとっくにかれちゃった。だから私はアンジエ。それ以上でも以下でもない。」

さつきまでとは別人の様な年相応の笑顔を浮かべ、右手のナイフを握りしめるアンジエを見つめる契は考える。

彼女もまた被害者なのだろうか。

だが被害者が可愛そうだと言つのはただの一面向的答えに過ぎない。そう、日本語に答えが複数存在するように、全ての存在には複数の答えが存在する。

いや、答えなど存在しないと言うべきだろうか。

被害者にも突き詰めれば何か責任が存在する。

総合的に見てどちらが悪いかなど他者が勝手に定めた基準でしかない。

それでも今日は本当に下らない思慮に耽る事が多い日だ。

結局の所、人は自分が信じ、想う道に進むしかないのだ。

それが例え、自分にとつて益に働く物であろうと、不利益に働く物であろうと。

結論は最後にしか出ないから面白い。

また最後に出るとも限らないから面白い。

それが契が生きる上で『答え』という言葉に関して抱く想いの全てだ。

そして契は言い放つた。

「では楽しもう。答えの出ない戦いを。」

言葉と同時に初動を取ったのは契だ。

右半身を前方に向けた構えのまま、右足の膝を折り始めると同時に左足で地を蹴り初動のスピードを稼ぐ。そして重心が完全に右足に移ったのを感じると次に右足で地を蹴る。

一時的に体を浮かした状態からの一段加速による突進。

同時に振りかぶった警棒を上段に構えて真っ直ぐに振り下ろす。対してアンジェはその一撃をナイフの腹で受ける、よう見せて体全体を右にずらした。

狙いは重い警棒の一撃を直接受け止めず、左斜めに受け流してからの反撃。

だが其の狙いを読み切った様に、振り下ろされる警棒は軌道を変えた。

狙い澄ましたかの様にアンジェが体をずらした方向への軌道変化。

「ふふつ、いいわつ、そう、この感じよ！」

本心から楽しそうに声を上げ警棒をそのまま右手のナイフで受け止め、瞬間左手で腰元の投擲用ナイフを契の顔面へ向けて投擲する。ほぼ0距離からの投擲。

避けられるはずの無いそれは人間の最も堅い部分により止められた。

アンジェは金属同士がぶつかる様な音聞くと共に信じられない物を見た。

歯で止めたのだ。

驚きと同時に左の脇腹に対し鈍く重い衝撃が響く。

アンジェの軽い体は吹き飛び壁に叩きつけられる。

警棒を振り下ろした後タイムラグを惜しむ様に右足での横薙ぎの蹴りを繰り出した後、ペツつと咥えた刃を吐き捨てて、

「真剣白歯取り、といつらしいぞ。どじかの漫畫に書いてあつた。

などと飄々と語る契は相手が少女で有る事など忘れ去つたかのように壁に打ち付けられたアンジェの頭部に目がけて警棒を振り下ろした。

だがその警棒は壁を叩く事になる。

寸前に素早くしゃがみ込んだアンジェは立ち上がる際の脚のバネを利用して契の喉元に目がけて白刃を伸ばした。

しかしその刃が契に届く事は無い。

体を全く無駄の無い動作で背後に逸らした事により、鼻の先を掠める刃。

その刃が軌道を修正して再び襲い来る前に警棒で握った腕<sup>1</sup>と叩き落とす。

と同時に、右膝がアンジェの右手首を狙い跳ね上がる。例えるなら鍊。

梃子の原理が導く結果はアンジェの手からナイフが離れるか、もしくは手首が碎けるか。  
しかしどちらも願い下げだつたのか。

アンジェは一度ナイフを手放し、右手を自由にすると同時に、警棒で弾かれた高速で回転しながら落下するナイフを器用に掴み取る。下手をすれば左手の指が無くなつていてもおかしくは無い、無茶をする物だと冷静に觀察する。

アンジェはフリーになつた右手で此方が不用意に上げた右膝を取ろうとするが、その手を振り下ろした警棒を跳ねあげ払いのける。小指に当たつた際微かな手<sup>2</sup>たえを感じるがアンジェの嬉々とした顔色が変わる様子は無い。

痛覚を感情で塗りつぶしているのか。

勝負を決めるには相手の意識を一撃で刈り取るしかない。

次で決める。

そう決意し、一度距離を取つた契に対してもアンジェはそつはせらるかと距離を詰めて来た。

攻守の入れ替わりを感じ取つた契は、ただその一撃を待つた。左手に持たれたナイフによる素早い突きの連続を躱し、いなし、受け止め続ける。

小ぶりの攻撃の連続に反撃の隙は見つからない。

防戦一方の硬直状態が続く中、契はチャンスを待ち続けた。そして、そのチャンスがやつて来る。

これまでで一番際どいコースを狙つた突きを、ギリギリの所で受け止めた直後、その突きは引かれる事無く契の警棒を押した。大の大人の力と比べても遜色の無い力で押され、契が体全体の筋肉に力を入れた瞬間だ。

人は力を入れる際に体が一瞬硬直する。

その硬直を狙つた、目で追い切れない程のスピードを持つた足払いが来る。

契はその足払いに掬われてバランスを崩した かに見えた。

それは恐らくアンジェから見れば絶好の隙だつただろう。

だが、不意に足を掬われると、覚悟した上で足を掬われるのではその意味合いや効果は全く違つてくる。

それに気づかずアンジェは逆手に持ちかえた必殺の白刃を完全に不可避なコースで契の心臓に振り下ろした。

だが、次の瞬間その嬉々としたアンジェの顔は一度目の驚きに染まる。

体勢を崩した人間に対しての完全な不意打ちとして振り下ろされた刃は、倒れる最中、警棒を投げ捨てた契の一本の指に受け止められたのだ。

刃を完全に挟み取つたまま背中からコンクリートに倒れた契は刃を離さない。

元より足払い後の無理な体勢で振り下ろされた刃にはスピードは

有つても重さは無かつたのだ。

ナイフを握んでいた指を素早くアンジェの右手に持ち替えそのまま腕を引く。

腕を引かれたアンジェは正面から契に引っ張られる形になる。

体の重心が根元から持つて行かれる感覚。

柔道技で言うところの巴投げの形だ。

だが此処は広い畠の上ではない。

距離を取った際、契は壁際まで移動し、自分はそれを追いかけた。必然的に迫る田の前の壁に、死を予見する。

頭からこの勢いでコンクリートに叩き付けられれば死に至つてもおかしくはないダメージを受けるだろう。

だが恐怖は感じない。

それは感情を奪われたからとか、そういう物では恐らく無い。

なぜなら今の自分には怒りという感情すらも存在していなかつたからだ。

ただ存在するのは、開放感だった。

生きている、なんてあの日から実感した事なんて無かつた。

先程までは。

そして先程久々に感じた。

私は生きているのだという感覚。

それは先程既に自分が死を無意識に受け入れていたからかもしれない。

光が闇の存在により初めて自分の存在を実感できるようにな。

これでもう、楽になつていいのかな。

解放感に抱かれたアンジェは迫りくる死に期待すら抱いていた。だが、契の右足で鳩尾を支えられ、投げ飛ばされる形、その寸前。契の砕けたはずの左腕が伸び、アンジェの襟を掴む。

そのまま投げられ、必然的に頭ではなく、倒立した状態で背中からコンクリートに強く打ちつけられ、更に続く鳩尾への重い衝撃。それは巴投げの姿勢のまま後転した契の爪先だったのだが、そんな事は知る由も無い。

やうしてよつやく、アンジェは意識を手放したのだった。

## 第一幕 最終章 『無力』（前書き）

このお話はフィクションです。  
実際にいる人物、団体、企業、国家、その他もろもろとは一切関係  
ありません。

## 第一幕 最終章 『無力』

さて、今回の騒動の一連のまとめを綴る。う。

入学式の一日前となつたあの夜。

結果として獅子の配役を演じたのは俺だったという事になるだろ

う。

追つ手の三人の内、息が有つたのは一人。

残念ながらお手製手榴弾を二つ（・・）仕掛けた部屋の入り口のトラップに掛かつたジーナという男は出血量から明らかに手遅れであった。

何より肺を貫通された状態で数十分の間放置されていたのだ、生きているはずもない。

これは俺がもう一般人には戻れない所まで来た事を示す。

まあどちらにしろ彼等は一度目の任務失敗の責務を取らされる形になつたのだろうから、遅いか早いかの問題ではあったのだろう。

だがだからと言つてその罪が消える訳ではない。

俺は殺すべくして殺した。

であるならそれ相応の責任を持つて一生を生きるのが責務という

ものだ。

まあその責務を負う覚悟はトラップを仕掛けた時点でとうに済ませていたので今更何か綴る事は無い。

それよりも残りの一人の処遇についてだが、感電により氣を失つていたトロイという名の男、彼はその場に放置した。

ただでさえ証拠隠滅に回収および埋没が必須の品が数え直すのも面倒な程あつたのだ。

その処理を右腕一本で行う労力を考へると男の回収なんてしてい

る暇は無かつた。

まあ、端的に言えば面倒だっただけなのだが。

目を覚まされても面倒なので用意してあつたロープで簾巻きにし

て工場の中に転がしておいた。

因みに回収物の中で爆発物は一つのみ。

不発した（・・・・）手榴弾だ。

工場中に爆薬を仕掛けたと言うのは当然ながらブラフだった。胸元にそれらしく装着していたのはただの光るだけの玩具だ。件の手榴弾に関してはやはり信用性の薄い外国サイトを参考にした上、それも元は玩具の入れ物で造ったのでは確実性と威力に問題のある物が限度であるようだ。

これは今後の課題として考えておかなければならない。  
だがそのお陰で結果的に上手くいった事もある。

何せ貴重な契約者を殺さずに済んだのだ。

自分の事ながら契約という事象に関しては分かつていない事の方が多い。

さて、その更年期障害さながらのヒステリー女だが、ロープと針金でこれでもかという程ぐるぐる巻きにしてティクアウトした。繩と針金分の重さを含めても大した重さでは無かつたが、右腕一本で巣巻きの少女を抱えて歩く姿をご近所の皆様に見られなかつたのは幸いだつた。

もつと言えばあの爆発音で近隣住人に警察を呼ばれなかつたのは本当に僥倖だつた。

流石に相手が國家権力様ではそうそう出し抜けるとも思えない。  
そういえば述べるべき事は他にもあつたな。  
どうして俺が、あの人間離れした怪力女を圧倒出来たのか。  
種を明かせば単純だ。

俺に、人の心を読むなんて力は無かつた。  
いや、正確には契約で得た力はその力では無かつたと言うべきだ  
ろうか。

俺が得た力は簡潔に言えばそつ、理解力だ。

具体的に言えば、相応の実力、理解を持った人間が記した書籍、  
また口述という形でも可能らしいが、その内容を即座に実行可能な

レベルで習得する、というもの。

その習得レベルはそれを記した人間の実力や、記された文章の具体性により変化する。

アンジェとの衝突で見せた見切り、太刀捌き、体捌きに關しては希理子の家で見つけた指南書によつて習得した物だ。

あの人外レベルを相手に通用するレベルだったのだからあの書を記した人物はよほどの実力者だったのだろう。

つまり実戦で使用してみるまではその力がどれほど実用性を持つかがわからない、一種の賭博の様な力なのだ。

また学園内でアンジェの投擲をかわして見せたのは読心術の図書を数冊読みあさつたお陰だ。

読心術とは端的に言えば、主に相手の視線、また仕草や拳動から相手の初動から行動、心理状態を探るいわば見切りに近い物であり、使用できる状況というのは相手を正面に見据え視線を合わせた状況のみだ。

またそれは統計学的な視点から類推される物であり之もまたギヤンブル要素であると言わざるを得ない所がある。

統計学は一般人を基準とした視線を主眼に置かれた物に成るのであいつた色物を相手取る場合など特に運の要素が強くなる。

それを踏まえた上で言うのなら、俺が今こうして五体満足で居られるのはただただ幸運だったからと言うしかないのだ。

結果とは最後に出る物であり、最後に出るとは限らない物である。結果論とも言えるべきそれは運命論とも言い変える事が出来ると俺は考える。

つまるところ、この世はやはり運を味方につけた者の勝ちという事だ。

その点で言つなら、あの女もまた、不発という幸運を勝ち取つた勝者であると言つても良いのかもしれない。

さて、大変面白くない結論を強引に持論から決定づけた所で現状を語らうと思つ。

まずは皆様どうでもいいと感じるであらう自身の状況を敢えて先に語らうと思う。

左腕尺骨及び橈骨複雑骨折、肘関節脱臼、右腕手根骨及び右足腓骨亀裂骨折、各所筋肉の断裂。

結果から言えばトレーニング不足といった所だらうか。

あとは適度なカルシウム摂取程度の事しか思いつかない貧困な発想に我ながら辟易する。

アンジェの蹴りを受けた部位が尽く骨折ないしひビが入つていいと言うのは少々笑えない話だと思うが、左腕以外は放つておけば治るだろうと医者に言つたら小一時間唾を飛ばされながら説教を喰らうハメになつた。

ちなみに何故こうなつたと聞かれて階段から落ちました、と答えたら言いたくないなら良いんだと言われた。

どうやら骨折でこの言い訳を使う人間が後を絶たないようだ。

次からは別の言い訳を考えようと思う。

そういうえ、入院となれば入学式に参加する事が出来なくなつてしまつため、何とか医者を説得しようかと思つていたのだが幸いその心配は無くなつた。

偶然とは何と恐ろしい物だらうか、希理子も契約者だつたのだ。薄々予感はしていたので実際には大して驚きはしなかつたのだが、希理子の力は治癒能力という、失礼ながら何ともご都合主義な素晴らしい力で、左腕以外の亀裂骨折に関してはものの五分も立たずに完治した。

まるで契約者のバーゲンセールとも言ひべきこの現状は、やはりリンが原因となつてゐるのだろうか。

よくよく考えてみれば、俺が倒れていのを見つけて即救急車を呼ばず自宅に連れ帰るという時点で人とは何か違う物を持つてゐると思付くべきだつたのだ。

といふか、自宅で輸血など出来る筈も無く彼女の力が無ければ俺は今頃出血多量で死んでいたかも知れないと言わわれては押し黙り感

謝の意を述べるしかないと言つ物だ。

ちなみに希理子がその力を得るに至つた理由や、代償に支払つたモノに関しては一切語られる事は無かつた。

本人曰く、秘密は多いほうが女は輝くモノだそうだ。

リンの前で語られたその格言による弊害はまだ発生していないがきっと近いうちにリンが俺の質問に簡単には答へなくなるであろう事は容易に予測できた。

そう、希理子に関して分かつた事と言えば、希理子は俺より二つ年上で、その上俺が入学する予定である私立高校で来年三年生を迎えるというのもお互いを驚かせた。

まあ家が近くてそそこの偏差値というだけの理由で選択した高校なのだから家同士が近ければ同じ高校を選択して居ても不思議はない。

さらに言えばさして都心に近い訳でもないこの街に高校が数えるほどしかない、と言うのもこの偶然の要因となつてゐるだろう。

次にリンに関してだが、ひとまずは予想通り、黒服の仲間を見る事は無くなつた。

どうやらアンジェを退けられたのは某組織にとつても予想外の事態だつたらしい。

こと一対一の戦闘に於いてアンジェを退けられる人間は組織にはほぼ存在しなかつたらしく、そのあたりが彼らの足を踏み留まらせている原因となつてゐるのだろうと予測してゐる。

ちなみに希理子の家にアンジェを抱えて帰宅した時には朝焼けが空を蝕み始めた時間帯だつたのだが、まずリンが起きていた事に驚いた。

リンと共に出迎えてくれた希理子に話を聞けば朝早く起きたのではなく寝ていなかつたのだと言つ。

家に荷物を取りに行つたという建前で出かけていた俺は右肩に担いだ大きな荷物と明らかに不自然に垂れ下がつた左腕をどう説明しようと考えている内にその小さな体からタックルを受けた。

何事かと思う間もなく、そのまま大声で泣きだしたリンの頭を撫でながら、自らの下した判断が本当に正しかったのかどうか考えなおす羽田になつた。

結果としては恐らく正しい判断をしたのだと想つ。

だが、方法は他にもあつたのではないか、正直に伝えた上で待つていて貰うという手もあつたのではないかとも考える。

しかし良く考えれば、結局このような結果は避けられない物だつたのだと確信し、過去を考えるよりこれからリンの機嫌をどう取るのかを考える事にしたのだった。

ちなみにそのまま泣き疲れて寝てしまつたリンは俺が病院から帰つてきてから暫くして田覚め、それからずっと俺と口を聞いてくれない状況が続いている。

まあようはどう機嫌を直して貰うか、未だに考え付いていないというわけだ。

何よりそれを考える前に、既に田覚めてこれもまた年相応と言える様な仏頂面で巣巻きにされたまま横たわつているアンジェから話を聞きたすのを優先してしまつた。

見かけの不機嫌さによらず、聞かれた内容には素直につらつらと答えるアンジェを気味悪く想い、

「気持ち悪いな、もう少し噛みついで見せたりビツだ。」

と言つてみた所、短く死ねとの返答を頂いた。

これだけ人の体をぐしゃぐしゃにしておいて良くもまあこんな口が叩けるもんだなと希理子に声を掛けたら、呆れた笑いを返された。さて、この呆れ笑いはどちらに向けられた物なのだろうか。

一先ずアンジェは希理子宅の使われていなかつた部屋に放り込んで、今情報を整理しようと思い返している状態に至るというわけだ。実は先程アンジェを二階の空き部屋に放り込んでから二階から成りやむ事の無い床をドスドスと叩く音が聞こえている。

あの巣巻き状態で一体どうやって床を叩いてるか知らないが蟻に襲われる芋虫のように悶える怪力女の姿を想像すると普通ならば胸

が高鳴るのを抑え切れないのだろうなと察する。

しかし残念ながら俺に女が悶える姿を見て悦に至る様な趣味も感情も存在しない。

大変残念な事だ。

それにしてもしつこい。

十分間はああして騒音を立て続けているのではないだろうか。

それはまるで生理的現象をもよおした子供のような。

ふむ、そういえば彼女を縛り付けてから既に半日は経っている。希理子がいくらなんでも可愛そ.udだからと水分や食事は与えていたようだが、下世話な話、お花を摘みに行く時間を与えた覚えがない。

まずつたか？

アンジエを放り込んであつた部屋に向かうとどうやら手遅れではなかつたようで、待つていたのは廃人と化した大人しい少女では無く、臨界寸前の某エネルギー炉の様に顔から煙を上げていると錯覚しそうな程怒り浸透な怪力女だつた。

「おいつ糞！！ほどけ！！ほどかねーと後でどうなるかわかつてんだらうな！舌噛んで死ぬぞ！？？？！？ 以下自主規制。」

想像通りに放送禁止ワードをこれでもかと散りばめた罵詈雑言を吐き散らすアンジエを見て居るとやはりこう、なんだろう。

犬に餌を与える寸前、犬が尾を向ける程フェイントを繰り返すような、悪戯心と言う奴だろうか。

「ふむ、どうやら部屋を間違えたらしい。」

俺は無表情のまま、おつと失礼と言わんばかりに目の前の犬に逆に尾を向けた。

「待て！待てクソ、いや契！」

「おかしいな、俺は節足動物門昆虫綱鱗翅目の幼虫、つまり芋虫に名前を教えた覚えなど……おつとすまん、これはこれは、アンジエじゃないか。余りに様になつた蠢き様で一瞬気付かなかつ

た……おやじうした、幼虫の真似を止めて次は歯医者の順番待ちの真似か、そんなに歯を食いしばっては閉口筋が発達しすぎて折角の綺麗な顔のバランスが崩れてしまつぞ。そんな筋肉を鍛える暇があるならもう少し丁寧に人に物事をお願いする方法から学んだ方がよりこれからを生きるためになると思うんだが。

「てめえ……欲しい情報あらかた絞り取つておいてその仕打ちかつ！第一アタシにもう反抗する意思はねえつて言つてるだろ？が！どうせアタシは組織に戻つたら即海の底だ！」

「ふむ、もう一聲といった所だな。」

世間ではいうドヤ顔とはいまの俺のような顔を言つのだろうか。いやまあドヤ顔と言つてもそれはいつも通りの無表情なのだが、きっと正面で転がるこれにはさぞ腹に据えかねるドヤ顔に見えていふ事だろう。

「……くそつ、アタシはアンタに生かされてるようなもんだ、アタシはアンタにそれを感謝するつもりは無い、けどそれはそれこれか。アンタに借りがあるのだけは紛れも無い事実だ。だからアタシがアンタや希理子やチビッ子に手を出す事は無い。」

こいつが怒り以外の感情を取引に力を手に入れたのは既に聞いた事項だ、その上でこんな事を口にするのは余程怒りを抑えつけた上での事だろう。

瞳を閉じて語る姿からもそれは察する事が出来る。

次の言葉を少しだけ待つが、必用は無いと言わんばかりにそれ以上は黙りこむアンジー。

「まあ、及第点だな。」

ロープを解いてやるとアンジーは出来る限り焦りを見せない様に、だが可能な限り足早に廁へ向かった。

扉を閉じる所まで本来は見届けるべきだったのかもしれないが、女性の用足しの音を敢えて聞こつとする程俺も不躾ではない。

今更何を言うと思われるかもしけないが、結局の所、俺はアンジエを既に信用しているのだ。

自ら過去に鍵を掛けた者同士として、というと少し慣れ合い的な意味に感じられるかも知れない。

だが意味合いとしてはどちらかと言つと同じ穴のムジナという方が近い。

類似する種の生物がお互いを利用し合つ関係、言つてしまえばそんな所だろう。

そんな油断を突かれ、戻つて来たアンジェから心ばかりのお返しとばかりに自殺を促す暴言と蹴りを頂いた。

「死ねつ！」

に加えてローキックだ。

自分の力を考えてやつて欲しい物だ。

初発を避けて追撃を警戒するがそれは徒労に終わった。

「何だ、廁の外装が気に入らなかつたのなら俺ではなく希理子に文句を言え。」

「……はあ……いや、確かめてみただけ。」

その後、溜め息を吐きながら肩を落としてベットに座り込んだアンジエがぽつりと零した五文字ばかりの言葉は四畳半の部屋で俺の耳に意味を持つて届く事無く消えた。

その言葉は彼女の怒り以外の感情を孕んでいた気がするが、その予感を信じるには、俺は少々捻くれ過ぎていたのだろう。

希理子の自宅である大屋敷の離れ。

そのリビングは古式日本風庭園の雰囲気を損なう事の無い蘭草の香立つ畳敷きの一室だ。

だがその雰囲気に圧倒的違和感を持つて馴染む小さな体躯が一つ。両足を体に抱え込み、膝に顎を乗せぶす一つとした面持ちで大し

て面白くも無むせうに見詰めるのは今では目にする事が希少になつたブラウン管式テレビ受像機に映された料理番組だ。

無駄にテンションの高い司会が叫ぶ品の無いジョークに笑いを振りまくのはブラウン管の向う側で、カணニングペーパーの指示通り動く観客席だけのようで、その画面の前に坐すたつた一人の銀髪の少女はピクリとも反応しない。

ちなみに家主である希理子は夕飯の買い物に出かけているし、アンジエは恐らく一階で眠つている。

さて、俺はこれから今回の騒動で最後の仕事完遂させなければならぬのだが、俺にとつて下手をすればこれが最も難易度の高いミッションである可能性がある。

「……リン。」

名前を呼ぶが全く此方を振りむく様子はない。

実はこれが三度目の呼びかけとなるのだが、どうにも進展がないまさに冷戦状態と化している。

無視される度、別のやらなければならぬ事に逃げて時間を稼いでみるのだが、先程のアンジエの一件で既にやる事は尽きた。背水の陣という奴だ。

浅く息を飲み、リンの考えているで有らう事を予想し最善手を選び取つて言葉にする。

「リン、お前に嘘をついて一戦交えに行つたのは済まなかつたと思つてゐる。だがリンを一緒に連れて行く事が出来ない状況だったのも譲る事の出来ない事実だつたという事を理解して欲しい。」

三度の呼びかけに沈黙を守つていたリンがその言葉にピクリと反応する。

手ごたえを感じた俺は言葉を続ける。

「どうか許してもらえないだろうか？」

ゆっくりと歩み寄り、頑ななその肩に手を置いた。だがその反応は予想していた物とは到底かけ離れた物だった。パシッ。

乾いた音を立てて払われた手から、眼の前の少女の瞳を見る。

その瞳の端には薄らと涙が浮かんで居て、整った相貌の中で残る幼さの残る薄い唇は堅く結ばれていた。

それは必死に泣くのを堪える、その歳の少女相応の顔だった。

俺はその顔を見て、他に考えていた口上を完全に忘れてしまう。何も言えないでいる俺に、随分と久々に聞いた様に思える声は、何時ものような硝子細工の鈴の音の様な音では無い。

その声は明確に怒っているとわかるそれ。

「……どうして、どうしてそんな事言つの？」

リンはそのままの勢いで、俺が茫然と差し出していた袖をあらん限りの力で引いた。

「それは……」

「違つ……」

俺の言葉を遮つて言葉は続く。

「わかつてるもんつ！お兄ちゃんがそうじた理由も、やつしなきやいけなかつた理由も……！」

俺はただ黙つて言葉を聞いた。

「でもつ……、でもつリンが怒つてるのはそつじやないのつ！だつてお兄ちゃんは、お兄ちゃんはリンのせいであんなになつたんじよ！？あんな、ボロボロになつて……それでもリンに優しくしてくれて……そんの……そんのつ……」

小さな瞳から溢れる涙は頬を伝い、顎の輪郭を覆う銀の髪を濡らす。それでも、言葉を発する事が出来る様に、ただ伝える事が出来るよう、顔をくしゃくしゃにして歯を食いしばる。

「だつて、だつて……、リンが、リンが怒つてたのは、リンにだもんつ……！お兄ちゃんのお家に勝手に転がり込んで、一生懸命護つて貰つて、でもリンは何もお兄ちゃんに反してあげられない。俺は悟つた。

「ああ、俺は何て馬鹿な勘違いをしていたんだろう、と。

リンがまだ小さい少女だからと完全に見くびっていたのだ。

眼前に立ち、零れ落ちる涙も構いなしに歯を食いしばる少女の、なんと立派な事だろう。

自分が達観しているだつて？

とんだ自惚れだ。

こんな小さな女の子の気持ち一つわかつてやれていない。

「リンが…、リンがそんな事でいじけてる時に、またお兄ちゃんは優しく自分が悪いって言つの……そんなの、そんなの違うよ……」

決壊した感情からボロボロと大粒の涙を流すリンを俺はしつかりと抱き寄せて、頭を撫でてやる。

泣き顔を見られまいと必死に俺の肩に顔を押し付けるリンに対しても言えるたつた一言だけの言葉を、もう俺には残つていなければ、のありたつけの感情を込めて零した。

ありがと、ヒ。

## 第一幕 最終章 『無力』（後書き）

第一幕はだいたい完成してあるから暫く更新します（キリッ  
とか言つていたわりに実はラストを書いておらず毎日の更新、とい  
う訳にも行きませんでしたが、なんとかこうして一先ずの最終話を  
皆様にお送りする事が出来ました。

誤字脱字だらけの上、文法上の間違い等みつけて行けば数え切れな  
い様な修行不足な文章ですが、お付き合い頂け感激です。

お話はこれからエピローグを経て第二幕へ続きますが、ひとまずは  
第一幕を読んでくれた数少ないながらも皆様に心からの感謝の意を  
表したいと思います。

ほんとうに、

ありがとうございます、と。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1173y/>

---

きーどあいらっく！

2011年11月4日15時14分発行